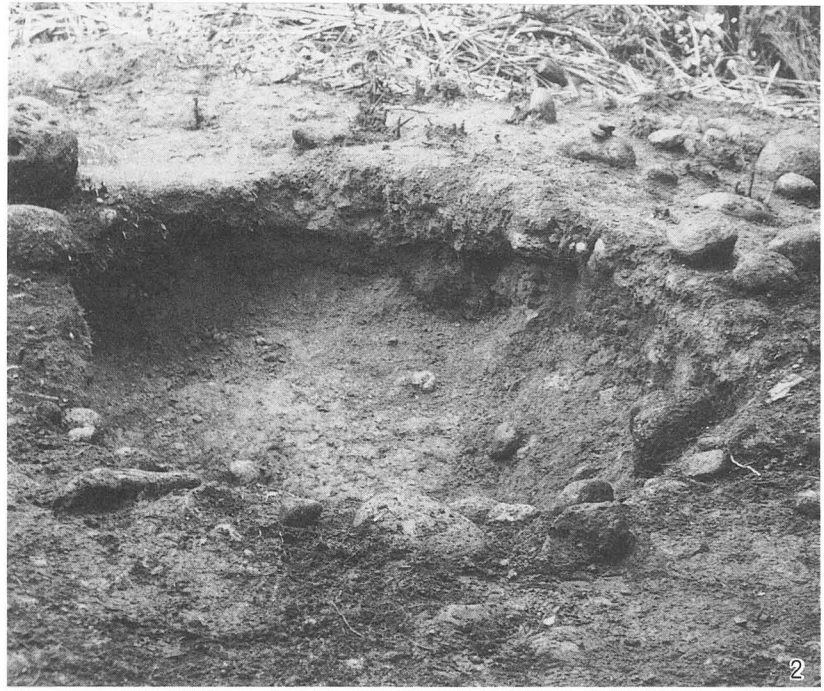
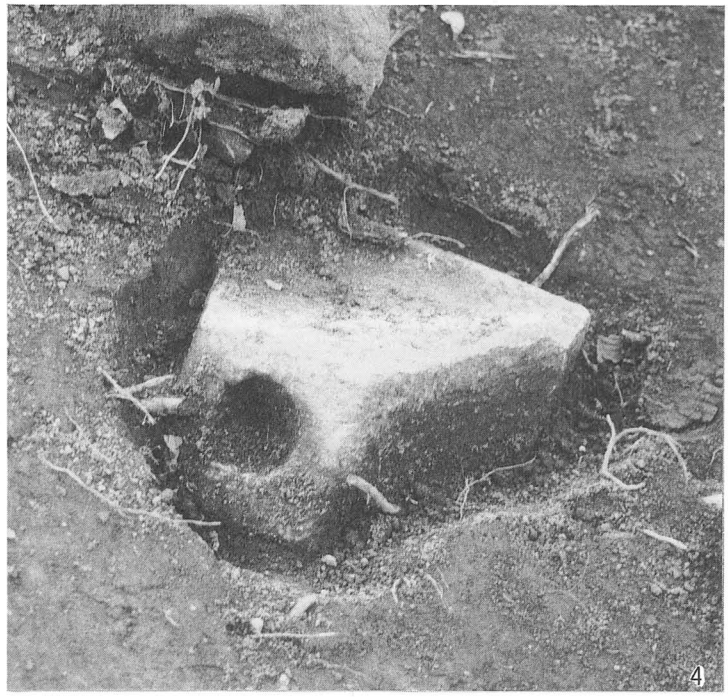
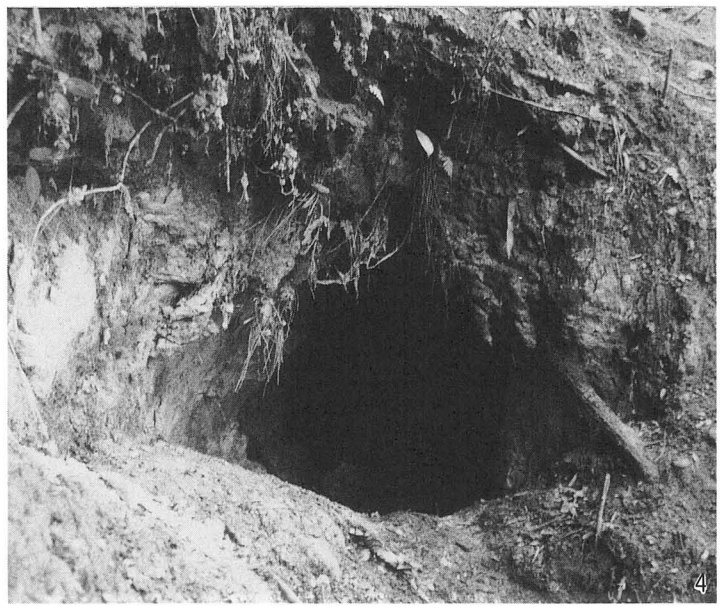
図版14　1.平坦面５・堂跡（北西より），2.堂礎石（南東より）



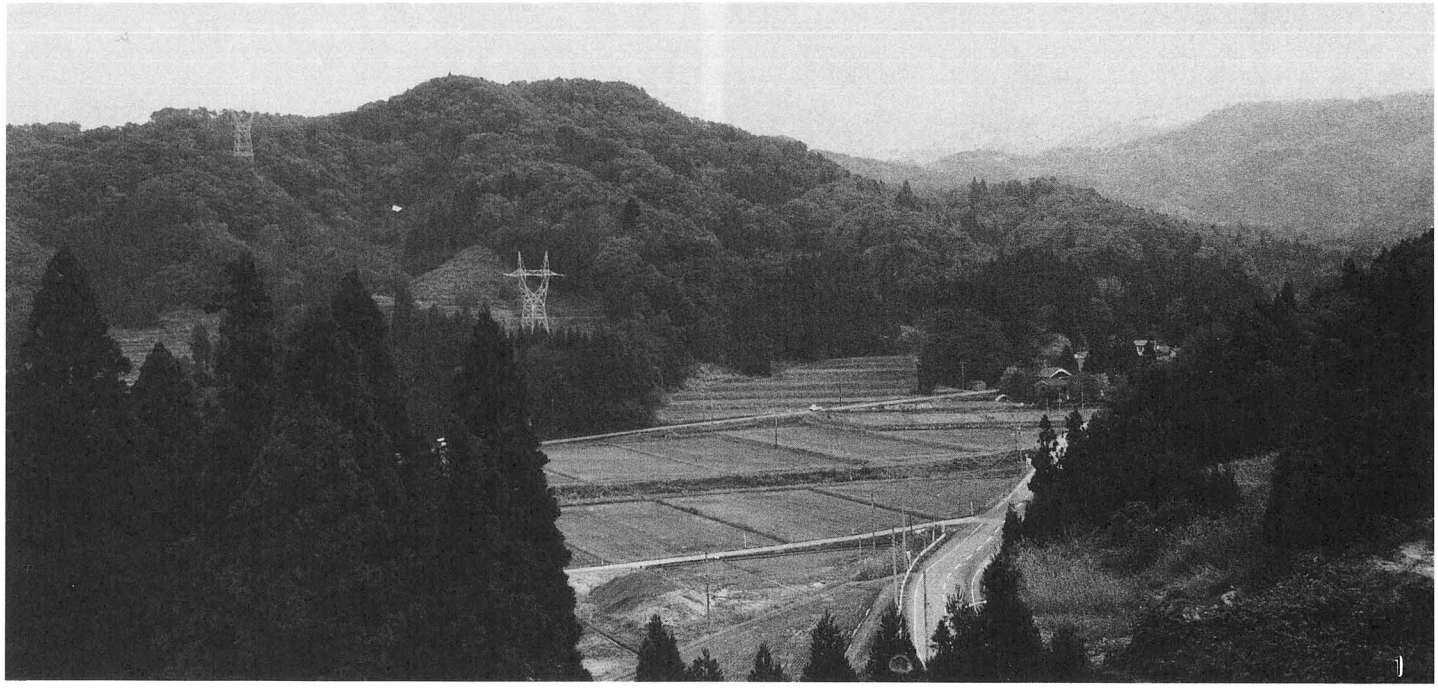


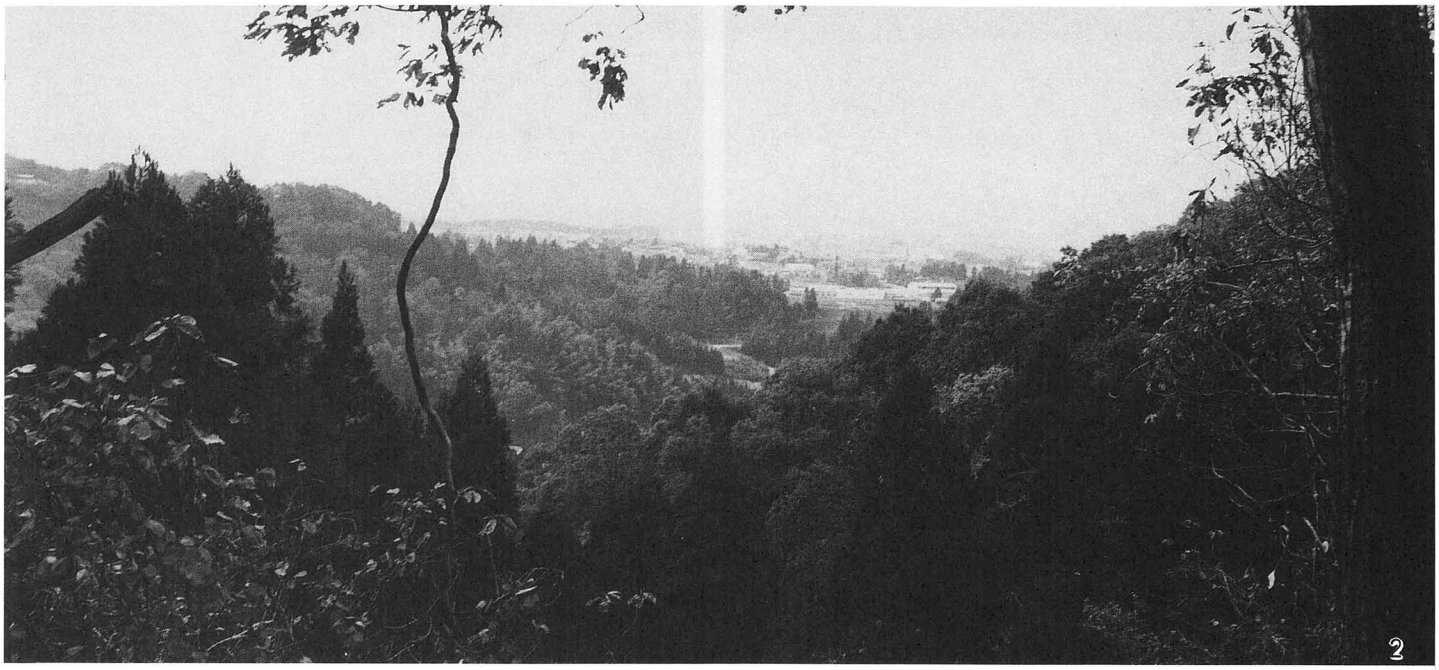
図版15　1.山門東側溝跡，2.山門直下土壙（墓跡？），3.山門石垣内火輪
4.山門西側火輪，5.山門石垣内地輪，6.塔跡集石付近加工石

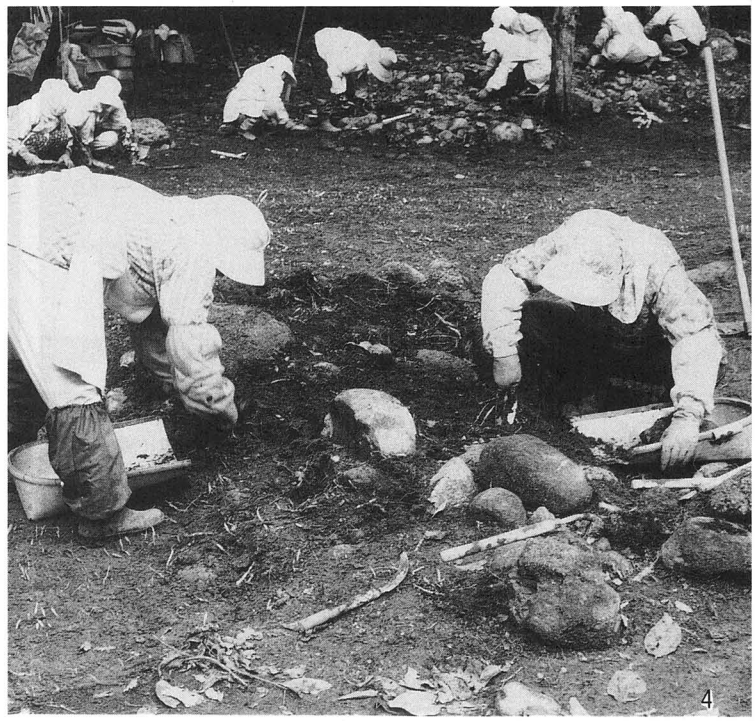
図版16　1.盛土１・盛土２（西より），2.平坦面1-Ⅵ（南より），3.平坦面1-Ⅶ（南より）



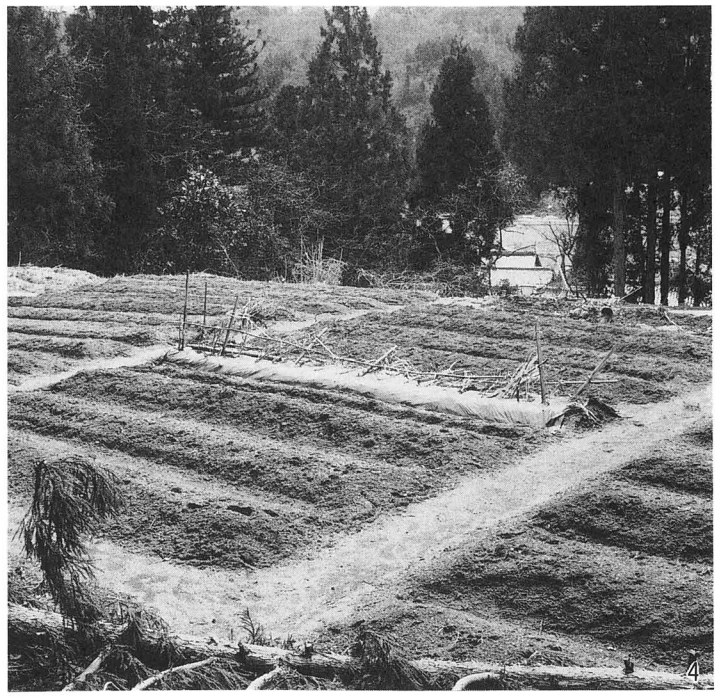
図版17　1.平坦面９（北西より），2.平坦面４（北より），3.湧水地（南より），
4.横穴（西より）



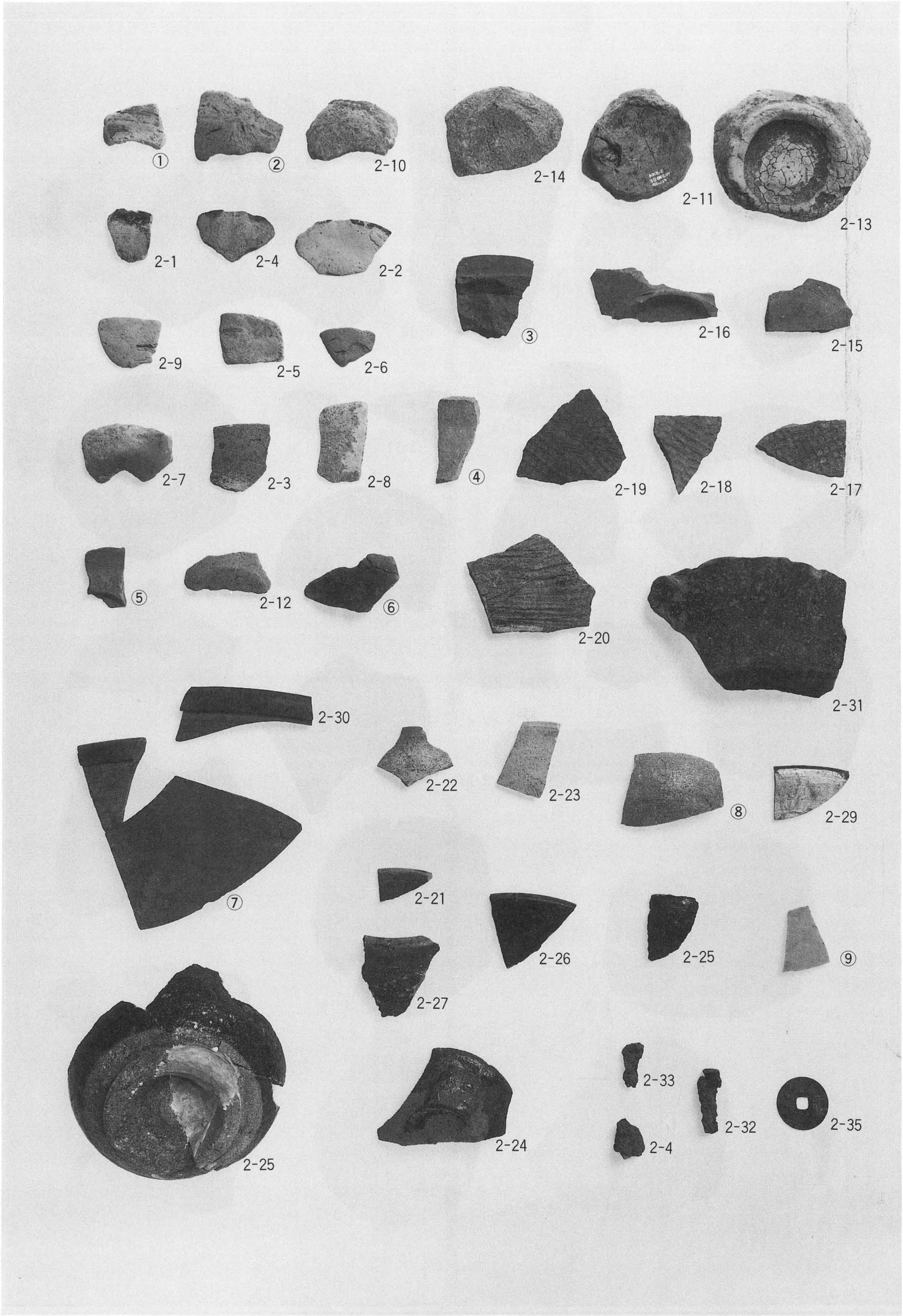




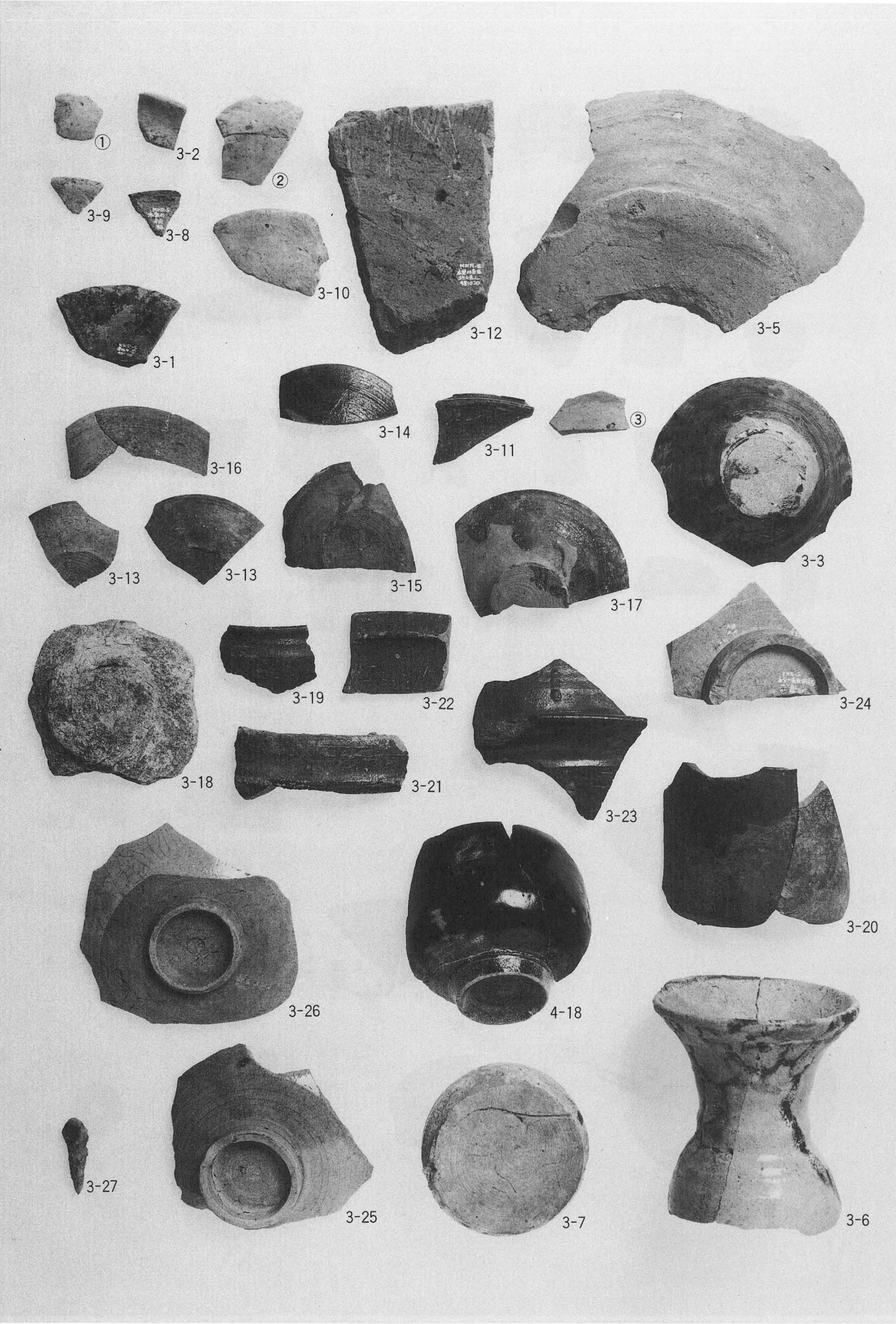
図版18　1.遺跡遠景，2.平坦面５・堂跡より平野部を望む
3・４.作業風景



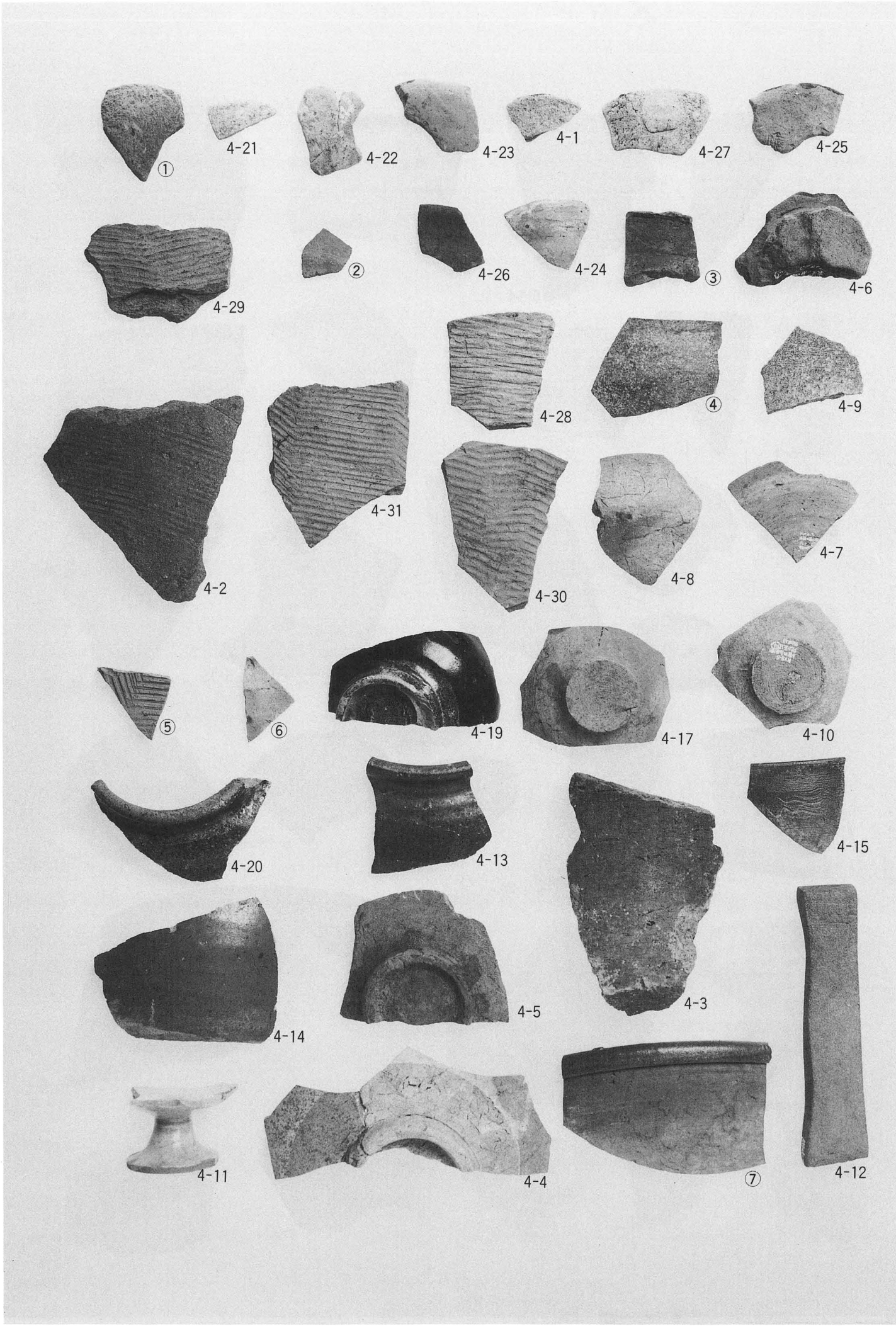
図版19　黒川地区周辺遺跡　1.平坦面１，2.平坦面２，3.平坦面３，
4.平坦面５（本覚院裏），５・６.平坦面４（日枝神社裏）



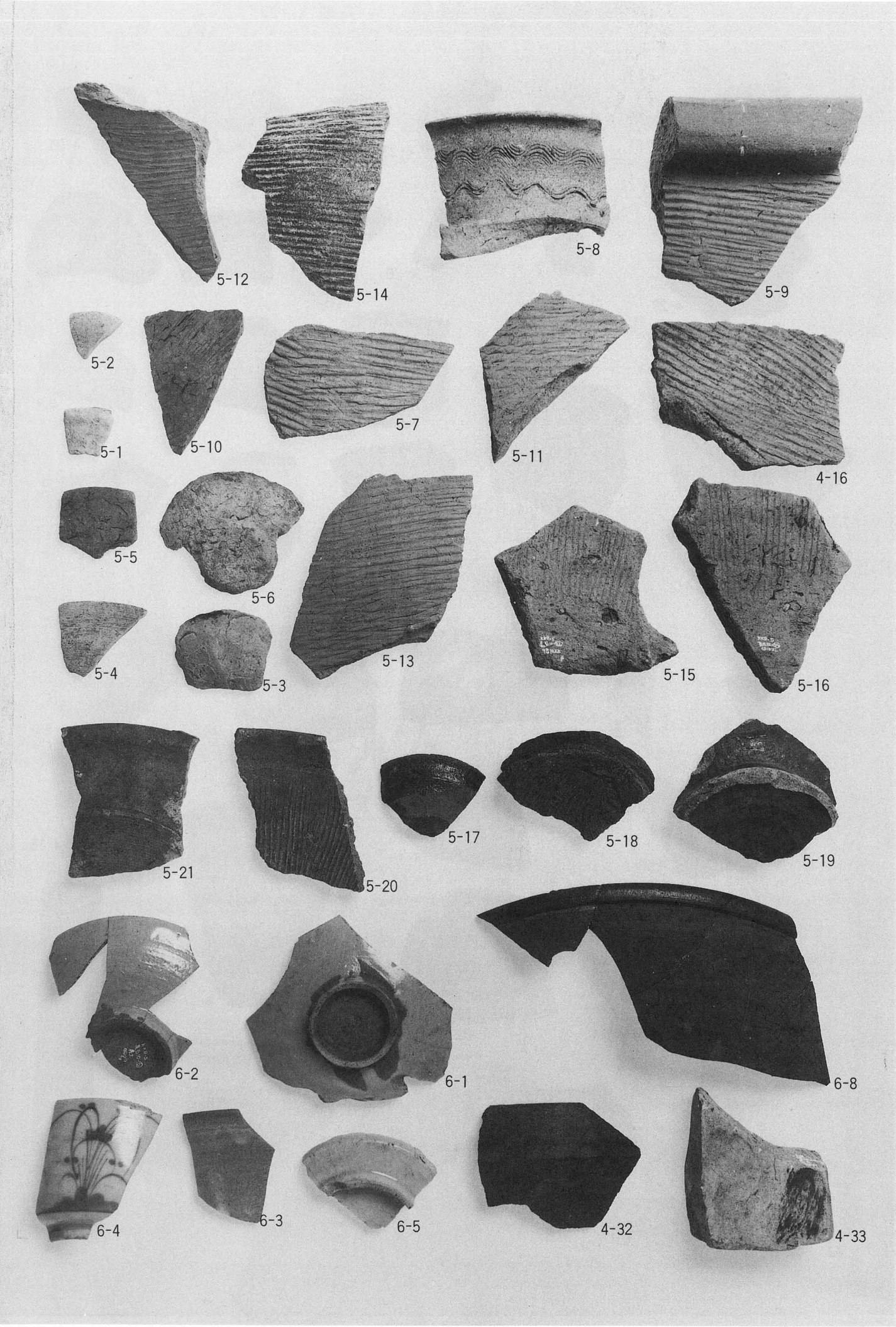
図版20　遺物写真（縮尺1/2）　平坦面１－Ⅰ（本堂跡）出土遺物（図版２参照）



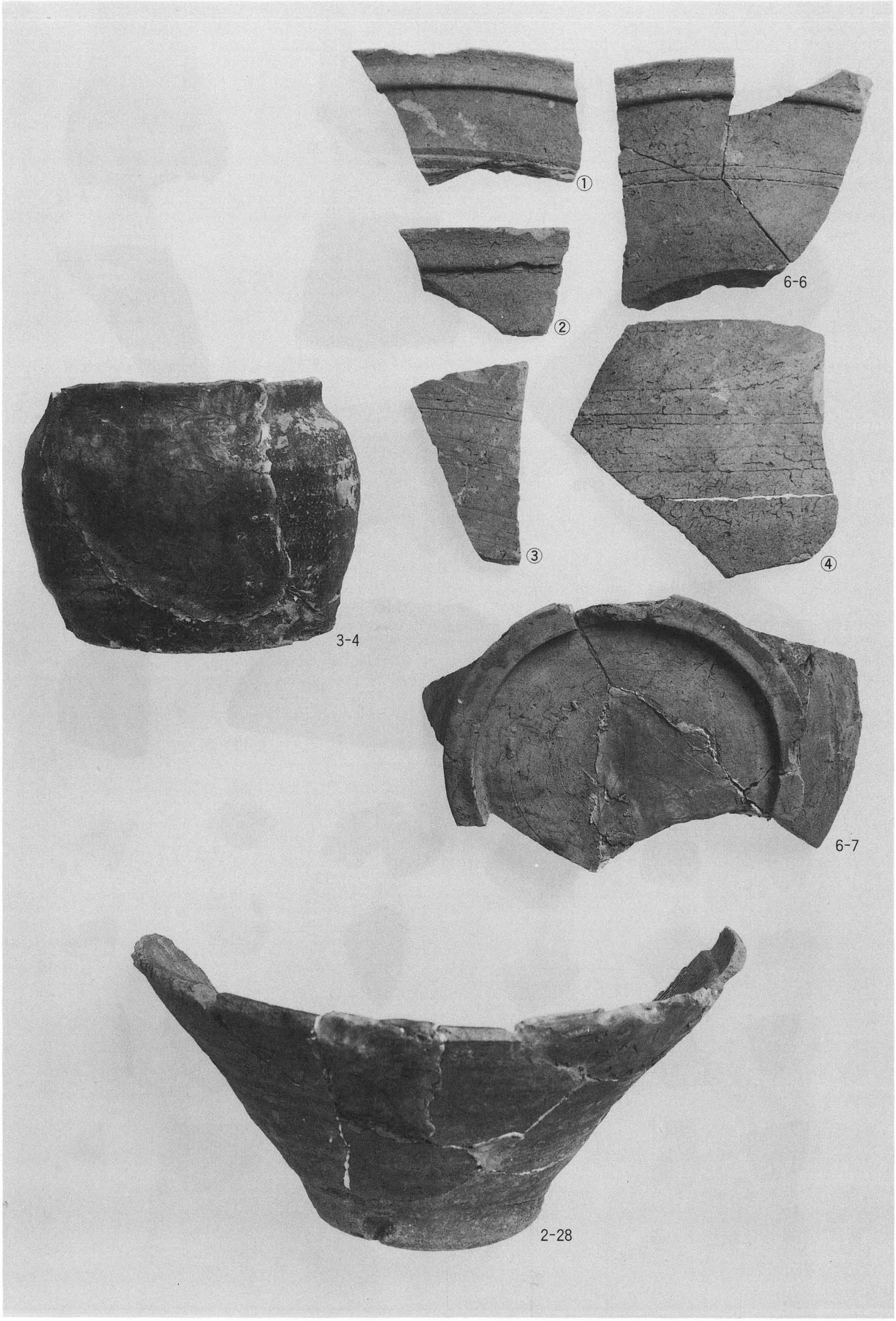
図版21　遺物写真（縮尺1/2）　池周囲・平坦面１－Ⅲ・平坦面２出土遺物（図版３・４参照）



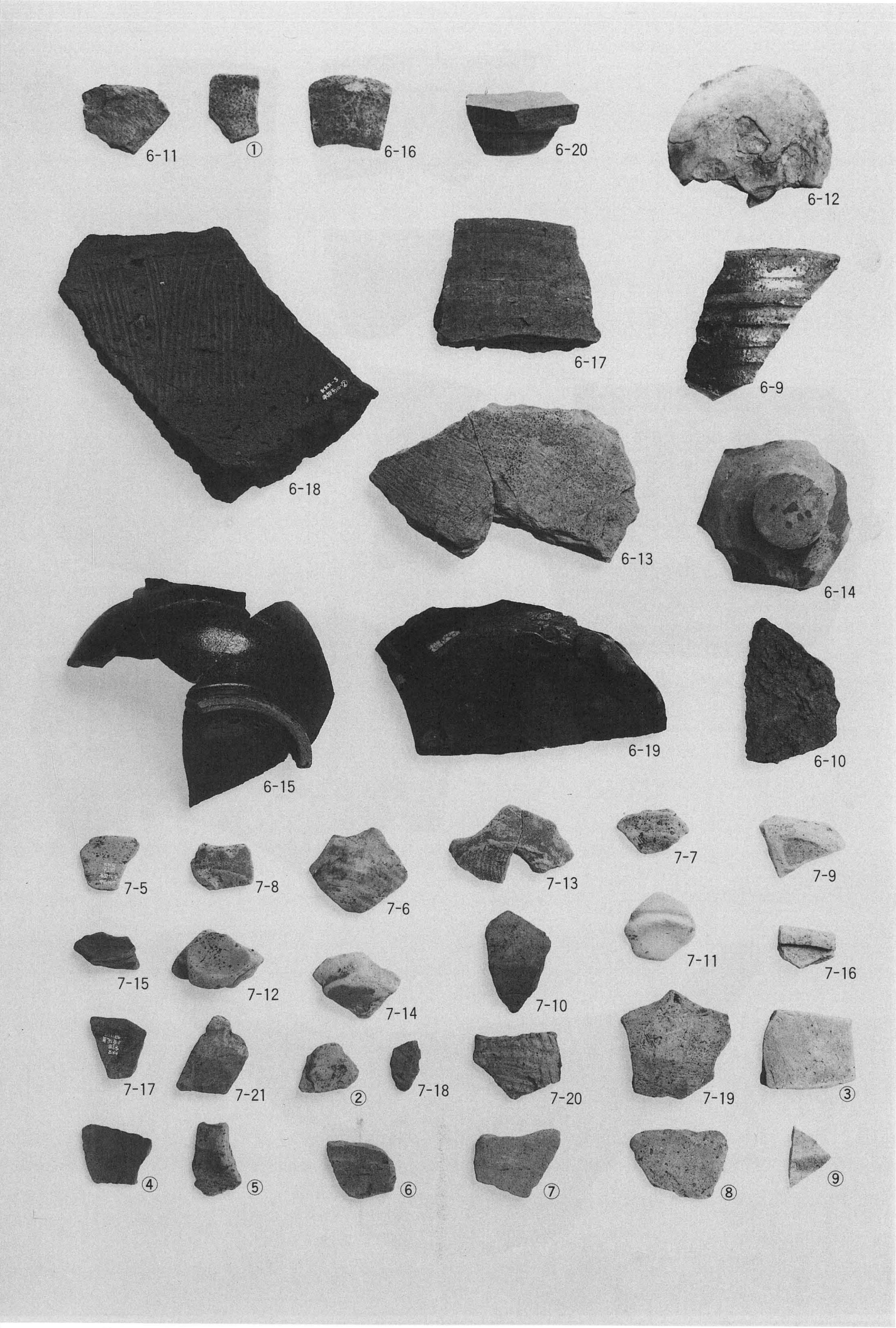
図版22　遺物写真（縮尺1/2）　平坦面１－Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ　平坦面２，集石１，山門出土遺物（図版４参照）



図版23　遺物写真（縮尺1/2）　平坦面１－Ⅱ・Ⅴ周辺出土遺物（図版４・５・６参照）



図版24　遺物写真（縮尺1/2）　平坦面１－Ⅰ～Ⅴ出土遺物（図版２・３・６参照）



図版25　遺物図版（縮尺1/2）　平坦面３（塔跡）・平坦面５（堂跡）・平坦面６・平坦面８・平坦面９出土遺物，分布調査採集遺物（図版６・７参照）

Ⅳ　調査結果

5．平成11年度の調査

（1）伝承真興寺跡の調査 ……213

（2）分布調査（開谷地区周辺）……218

（3）まとめ ……220

引用・参考文献 ……221

挿図・図版等目次

第1図　遺構実測図（遺構全体図）……178
第2図　遺構実測図（平坦面3）……180
第3図　遺構実測図（池1、SK1）……182
第4図　黒川地区周辺遺跡（霊場関係）分布図 ……182
第5図　黒川地区周辺遺跡（平坦面6・11・12）……184

付図5　伝承真興寺跡遺構実測図（平坦面1-Ⅰ）

図版1　伝承真興寺跡周辺航空写真 ……232
図版2　遺物実測図（本堂跡）……233
図版3　遺物実測図（本堂跡）……234
図版4　遺物実測図（SK1）……235
図版5　遺物実測図（平坦面1-Ⅲ・Ⅳ、平坦面3ほか）…236
図版6　遺物実測図（分布調査）……237
図版7～16　遺構写真 ……238～247
図版17～22　遺物写真 ……248～253

（1）伝承真興寺跡の調査

1．遺構（第1～3図、付図5、図版7～14）

真興寺跡は、標高約135mから125mの山中に占地する。谷地形の最深部に人為的に削平された平坦面が大小11カ所形作られている。昨年度の調査では、各平坦面に基壇状の高まり5・礎石建物3・集石9・石列・盛土・池状の土壙などが検出された。寺域と考えられる部分は総面積約3,200㎡で、そのうち平坦面の総面積は約1,800㎡であり、かなりの開削が行われている。

本年度の調査は、昨年度検出された個々の遺構の性格を明らかにすることを目的とした。この為、礎石建物の基壇状の高まりの掘り下げなどを中心に調査を行い、本堂の礎石・池・池から山門まで続く溝跡・土壙2カ所・参道の石段などを検出した。なお遺構の名称については、昨年度発行の『黒川上山古墓群発掘調査 第4次調査概報』に従う。

平坦面1（第1・3図、付図5、図版7～13）

平坦面1は、面積は約1,300㎡を測る。昨年度は、基壇状の高まりなどによって、平坦面1－Ⅰ～Ⅶの7カ所に区分した。今回調査では、平坦面1－Ⅰ(本堂跡)・Ⅲ・Ⅳを中心に掘り下げを行った。掘り下げた面積は、約350㎡である。

平坦面1－Ⅰは、X79560～795880、Y21060～21090に位置する。ここでは昨年、基壇状の高まりに築かれた礎石建物を1棟検出した。検出した遺物の時期が11世紀から16世紀まで年代幅があったことから建物の建て替えの可能性を考え掘り下げを行った。また建物の規模が、平坦面1－Ⅰの基壇状の高まりに収まらない可能性も考え、掘り下げを平坦面1－Ⅳまで広げた。なお、検出した礎石と考える石には礎石1・礎石2と番号を付し、元位置を保ち比較的大きな石なのだが、礎石なのか判断できなかったものには、ローマ数字のみ付した。

この結果、礎石建物が3棟復元され、2回の建て替えが考えられた。1棟目は礎石1・2・3から復元した。ほとんどの礎石は、後世の畑作などで移動しているが、規模は5×4間または5×5間と考える。礎石1・2は、径約40㎝、比較的大きい礎石3は長径約60㎝、短径約50㎝である。柱間は2.9m、方位はN45°－Eである。またこの礎石建物と、集石4付近の石17・18・集石6の北西隅を結んだラインが平行になる。山門の石段の向きも平行になることから、この寺域に最初に築かれた礎石建物の可能性が高い。次に、検出した遺構のイ・ロと、礎石3より方位N53°－Eの礎石建物を復元した。礎石3とイ・ロの間隔は6.1mと広く、礎石3とイ・ロの間にも礎石があった可能性がある。さらに礎石4と礎石5より、この礎石建物に庇があったのではないかと考えた。また平坦面1－Ⅰの中央付近に、東西方向と南北方向にそれぞれ石列①・②が並ぶ。この石列は直行する。石列②は、石列③と、基壇状の高まりを形作っている裾部の石列に平行する。石列①の方位は、N49°－Eである。またこの方位は、昨年検出した礎石建物の方位とほぼ一致する。さらに石15・16の中央と石列①は直線上に並ぶ。以上より昨年検出した礎石建物が、この寺域の最終的な建物跡と考えた。以上の建物は、ほぼ寺域の中心にあることから、本堂または金堂などの中心施設と考える。遺物は9世紀から19世紀までのものが断続的に出土している。9～10世紀の遺物はわずかだが出土しており、その後中断し、15世紀末～16世紀のものが多く出土する。また17世紀のものが存在せず、18～19世紀のものが出土する。しかし9世紀から礎石建物が存在したとは考えにくく、庵など何らかの土地利用がされていたのではないかと考える。また、焼土を3カ所検出した。焼土3の西側には経20㎝程の石が並んでいる。焼土3はこの石列に関連する遺構ではないかと考える。

平坦面1－Ⅲは、平坦面1－Ⅰの南東側の地区である。昨年はこの部分で、池状の土壙2箇所と石敷き溝と考えられる石列などを検出し、庭を想定した。本年度は池1の泥を取り去り、池底まで検出したほか、池1から山門付近まで続く溝跡と、SK1・SK2などの土壙を検出した。

池状の土壙、池1はX79562～79566、Y21097～21100、本堂の東側に位置する。長径約3.0m、短径約1.9mの不整楕円形で、南西側には石敷をもつ。生えていた水草と泥を取り去ると、土壙の南西側と北側の縁に経約15～30㎝程の石

が張り付けられている。底から検出された石は、張り付けられていたものが転がり落ちたもののようである。底からは水が絶えず湧き出している。石が張り付け整えられていたこと、水が湧き出していることなどから、池と考える。

溝跡はX79555～79567、Y21078～21097に位置し、本堂の南西側に沿うように延びる。池1の南西側の石敷から、本堂に向かって石列を辿り、本堂横で向きを南西に変え、本堂横の集石を辿り、山門横の石列まで続いている。池1南西側の石敷は昨年度の調査で検出されたものであり、幅約1m、長さ約2mである。石が整然と並べられているが石と石との間隔がやや開けられていたため、排水を考慮した施設と考えた。石敷から本堂に向かって並ぶ石列は2列になっており、北東側の列が径20cmほどの石が整然と並べられている。南西側の石列は径25cmほどの石が、間隔を開けて据えられている。この径25cmほどの石の列は、本堂横で方向を南西に変え、集石部分まで続く。本堂横で石列が向きを変えた部分は、小石は確認されるがまばらである。本堂南側の集石は、底の部分を南東側から見ると、径15cmほどの石が整然と並べられている。そのため、溝状に整然と並べられた石列の上に、後世、畑などに利用した際に小石が集められたのではないかと考える。またこの東西方向の集石部分に、直行するように、石列が2列配されている。水の流れの向きに変化を付けたものかと考える。さらにこの南西側には、昨年度検出した石敷き溝が続いている。この溝は径35～55cmほどの比較的大きい石が２列並んでおり、その列の間には拳大の石が敷かれている。以上、池１から本堂横を辿って山門まで、溝が続いていたものと考える。

ＳＫ1はX79557～79560、Y21098～21101、平坦面1の東側隅に位置する。長径2.4m、短径1.5mほどの不整円形である。当初ＳＫ1はこの4分の1ほどの大きさで検出した。土層断面図では第1層としている黒褐色土の部分で検出したが、第3層の黒色土がさらに潜り込んでいたため、検出面をさらに精査する必要があった。また南東側に、さらに広がる可能性がある。第3層の黒色土は炭化物を非常に多く含み、この場で火を焚いたか、一端焚いたものをまとめて廃棄したと考えられる。ＳＫ1からは、15世紀末から16世紀代の、まとまった量の土師器皿を検出した。土師器皿は第3層に多く検出され、何らかの儀式が行われた可能性がある。

ＳＫ2はX79555～79559、Y21095～21099、本堂のある平坦面1の南側隅に位置する。平坦面3の約3m下にあたる。長径3.6m、短径2.8m程の楕円形で、底には径60cmほどの石が検出された。ＳＫ2の西側には集石5がある。集石5・ＳＫ2は、ともに関連ある遺構と考える。また平坦面3に伴う遺構である可能性も考えられる。

平坦面３（第1・2図、図版９・13）

平坦面3は、本堂のある平坦面1の南東に位置し、平坦面1から約3m高まった削平地である。面積は約110㎡である。昨年度の調査では、基壇状の高まりに方形の礎石建物を検出した。基壇は、底面で約6×6m、上面で約4.4m×4.4mで、この上面に3×3間の方形の総柱建物が復元できる。柱間は真芯で約1m＋1.3m＋1mで礎石に一部欠落が見られるものの非常に整然とした作りである。礎石に使われている石は、外柱が40ｃｍ前後、内柱が20ｃｍ前後の凝灰岩である。基壇状の高まりの裾には上面の礎石にほぼ対応するように20cm前後の石が並べられており縁ないし庇などが考えられた。昨年度の調査では、建物の規模や外柱と内柱などから、三重塔ないし多宝塔など塔があったものと推定した。また、基壇状と表現した部分も亀腹など塔の土台となる部分と想定した。そのため、本年度は基壇状の高まりにトレンチを入れ確認を行った。トレンチは、塔の中心と礎石に掛かるように設定した。この結果礎石の下には、拳大の石が根石としてびっしり敷かれていることを確認した。また塔中心では、径1mほどの円形の浅い遺構を確認し、中央には径25cmの石を確認した。建物が塔であるならば、鎮壇具などが出土すると想定したが確認できなかった。また平坦面3は、山を削平して作り出しているため、北東部と南東部の崖は崩れている。そのためもとの平坦面3の範囲を確認する必要があった。崩れた部分と考えられる土砂を排除したところ、基壇の北東側裾の部分に金属製品を検出した(図版5－29)。また、この建物の正面は本堂側で、そこに集石7があること、平坦面3の南西側にＳＫ2と集石5が見られること、平坦面3の北西側の等高線の状態が張り出していることなどから、階段状の遺構があることを想定し

てトレンチを入れたが、明確には確認できなかった。ただしＳＫ2と集石5の北側に拳大の石が多く検出され、周囲に長径40cmほどの大きな石があることから、階段状の遺構があった可能性があると考える。

参道（第1図、図版15・17）

参道部分は；寺域の入口部分に当たる。スロープ状で、このまま尾根道に続く。石段が3段検出された。2段目が最も残りが良く、径20～25cmほどの石が約1.3m幅で確認された。1段目は、残っている部分で幅約1m、3段目は幅約70cmである。３段目は径約30cmの比較的大きな石が使われている。３段とも石の前面が揃っている。検出された３段の石段より、上部の方が勾配が急なため、石段が続いていたのではないかと想定されるが検出されなかった。また石段の南東側には、長径50cmほどの石が散乱しており、寺域の入口部分を示す施設があった可能性も考えられる。

平坦面11（横穴前面）（第1図）

平坦面11は、Ｘ79552～79555、Ｙ21057～21061に位置する。横穴の入り口部にあたり、面積は約4.5m²である。平坦面11周囲の土は砂質で崩れやすく、平坦面11を覆っている土も、周辺の土が崩れたものと考えられる。当初、横穴内部の調査を行う予定だったが、周囲の壁が非常に崩れやすいため、内部の調査は出来なかった。平坦面11は横穴に伴うような何らかの施設、または横穴に通じる階段のようなものを想定したが確認できなかった。

２．遺物（図版２～5、図版17～22）

調査により検出した遺物は、土師器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸・唐津・鉄製品・銅製品などである。ほとんどの遺物は建物跡とその周辺の掘り下げの際に出土した。ＳＫ1からは、まとまって土師器皿が出土した。遺物は9世紀から19世紀のものが出土した。しかし、旧真興寺が9世紀から19世紀まで継続して存在したとは考えにくく、出土遺物もすべての時期のものが見られるわけではない。全体では、破片数で449破片、９～10世紀のものが26破片、15世紀末～16世紀のものが309破片（うち177破片はＳＫ1より出土）、18～19世紀のものが82破片である。

以下、遺構ごと、図版ごとに遺物の特徴を述べる。

平坦面１―Ⅰ（本堂跡）出土遺物（図版２・３・17・18）

図版2の1～38、図版3の1～37は本堂からの出土である。図版2の1～16は土師器皿である。1・2・3・14は、口縁部が薄い器形である。小破片のため、全体の器形ははっきりしない。4は口縁端部を丸く収め、口径は9cmである。5～12は非轆轤成形で、直線的またはやや内湾気味に開く器形である。口縁部に一段の撫でを施す。このうち8・10・11・12の口縁部は、刷毛状の工具で幅1.5cmほど撫でられている。8・11・12は、内外面にタールが付着する。13は轆轤成形で、口縁部を厚く作る。体部内面は轆轤撫で調整される。口径は8cmである。15は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく摘まれている。口縁部には1段撫でを施す。口径は9.4cmである。16は口縁部内面を厚く肥厚させ、口縁部を強く一段撫でる。1～16の色調は黄橙色・浅黄色を呈するが、8・11は黒変している。15世紀末～16世紀のものと考える。17～30は土師器皿の底部である。いずれも底部は回転糸切りであるが、25～30は摩滅が著しい。底径は3～7cmを測る。17は柱状高台をもつ。31は土師器・甕の底部破片である。外面の調整は削りである。32～38は須恵器である。32は杯の口縁部で、口径14cmを測る。33の杯蓋の口縁部は折曲げられており、口径は16cmを測る。34の皿は断面が逆三角形の高台が付く。33・34は10世紀代のものと考える。35～38は甕の体部破片である。35～37は外面に平行叩きを施し、35・37は内面に同心円紋を施す。36・37の平行叩きの3cmあたりの条数は7条である。38は外面に擬格子状平行叩き、内面に扇形紋を施す。35～38は9～10世紀代のものと考える。

図版3の1は、須恵器・甕の体部破片である。外面に平行叩き、内面に同心円紋を施す。2・3は、珠洲の甕または壺の体部破片である。4～6は越中瀬戸の皿である。口径は、7.4～13cmを測る。4は体部下半から口縁部まで直線的にのび、内面は全面に外面は体部に茶褐色の鉄釉を施す。18世紀代のものと考える。5・6も鉄釉を施すが、6は釉が剥げ

ている。7は口縁部を巻き込んであり、内外面とも鉄釉を施す。8は越中瀬戸の蓋で、内外面に鉄釉を施す。9は越中瀬戸の壺の口縁部と考えられる。内外面に鉄釉を施す。口径は13.0cmを測る。10・11は唐津の擂鉢である。口縁部は肥厚して外反する。内外面に鉄釉を施し、口径は10が30.0cm、11が32.0cmを測る。12は無釉の陶器である。口縁部は平坦に作られている。口径は26.0cmである。13は無釉の陶器の皿である。黄橙色を呈し、口径は10.8cmを測る。15は皿で、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が開く。内面に黒色の鉄釉を施す。16は京焼系の皿で、内湾しながら立ち上がる。内外面に薄いオリーブ色の透明釉を施し、口径は15.0cmを測る。19世紀代のものと考える。17は無釉の陶器の皿である。高台径は、7.4cmを測る。18・19は京焼系の陶器である。18は内外面に薄い淡黄色の透明釉を施し、19は内外面に灰白色の透明釉を施す。18・19は18世紀代のものと考える。20は陶器の御仏飯である。胎土は粗く、焼成が甘い。底部は回転糸切りで、底経は5.2cmである。21は刷毛目唐津の碗である。底径は4.6cmである。胎土は硬質で、赤みをおびた褐色を呈する。白土を刷毛で塗り縞状の文様を施し、透明釉が掛けられている。22は磁器で、薄い緑色の透明釉を施す。23は青磁の碗の底部である。底径は4.5cmである。24～27は伊万里の碗である。24は草花文を施す。25は文様装飾にコンニャク印判を用いる。24・25は18世紀代のものと考える。26・27は19世紀代のものと考える。28は煙管の吸口部である。張り合わせ面が観察できる。29～31は寛永通宝である。

池１出土遺物（図版４・19）

図版4の2は池1から出土した破片と、ＳＫ1から出土破片が接合したものである。器壁は薄く体部は直線的に開く。口径は11.6cmを測る。内外面の摩滅が著しい。口縁部にタールが付着する。15世紀末～16世紀代のものと考える。

ＳＫ１出土遺物（図版４・19・20・22）

図版4の1～49は、非轆轤成形の土師器皿である。1～45は体部が直線的、またはやや内湾気味に開く。口径が8～12cmの小さいものが多く、14～15.4cmのものも存在する。口縁部は外反し、口縁端部は小さく摘まれたものが多い。口縁部外面には一段の横撫でを施す。撫で幅は4～9mm程である。42・44・45の撫で幅は約1.4cmで、比較幅の広い横撫でが施されている。また42・44・45は同一個体の可能性がある。内面の調整は横撫でを施し、右回りに外へ撫で抜いているのが29と32で観察される。また32では見込みを撫でた後横撫で調整を施し、その後口縁部内面に幅の狭い横撫でを一周施しているのが観察される。色調は黄橙色・薄い黄橙色・浅黄色が多いが、黒変しているものもある。1・2・12・14・25はタール状の煤がつき、灯明皿と考えられる。胎土は比較的緻密で、赤色酸化粒を含むものも見られる。15世紀末～16世紀代のものと考える。46～49は体部が内湾的に立ち上がり、口縁下部で大きく屈曲する。46・47は屈曲部より上を横撫でする。48・49は屈曲部の上方に幅５mm程の溝が入る。色調は黄橙色を呈する。50は珠洲焼の甕または壺の底部である。底径は10cmである。51は銅製品で、全体に青緑色を呈する。内面は縦に２条、横に３状の隆線が張り付けられている。全体の器形については不明である。52は鉄釘である。錆が多いが角釘と考えられる。

平坦面１―Ⅲ出土遺物（図版５・20・21）

図版5の1・2は土師器皿である。1は口縁端部をわずかに摘む。口径は12.0cmである。色調は黄橙色で、胎土は緻密である。2の体部は内湾的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。外面の摩滅が著しい。口径は12.0cmである。色調は浅黄色である。15世紀末～16世紀代のものと考える。3は須恵器の杯で、口径は14.0cmを測る。4は須恵器・甕の体部破片である。外面に平行叩き、内面に同心円紋を施す。内外面の色調は灰色であるが、断面は薄い赤紫がかっている。5～7は越中瀬戸の皿である。5は体部下半から口縁部まで直線的にのび、内面は全面に、外面は体部に錆釉を施す。底部は回転糸切りである。口径は10.8cm、底径は3.8cmを測る。6は5とよく似た器形である。内面は全面に、外面は体部に茶褐色の鉄釉を施す。底部は回転糸切りで、口径は10.0cm、底径は3.8cmを測る。5・6は18世紀代のものと考える。7は体部が丸みをもって立ち上がる。削り出し高台で、断面は逆三角形である。内面は黒褐色の鉄釉で蛇の目釉剥ぎし、釉剥ぎした部分に薄く茶褐色の鉄釉を施している。外面は高台付近が無釉である。口径は10.4cm、高台

径は4.4cmを測る。7は平坦面1－Ⅲの中でも、池1の北側のほぼ池の肩部で検出された。8は無釉の陶器の皿である。外面の轆轤目がはっきりしていて、底部は回転糸切りである。色調は黄橙色を呈する。口径は9.9cm、底径は4.7を測る。口縁部に対して、底部が大きい印象を受ける。9・10は越中瀬戸の壺である。体部が丸みをもち、口縁部が若干くびれる。轆轤目が明瞭で、内外面とも錆釉を施す。口径は10.0cmで、9・10は同一個体と考えられる。11・12は越中瀬戸の匣鉢の底部である。11は轆轤目が明瞭で、底部は中央に向かって器壁が薄くなる。回転糸切り痕が見られる。体部外面に鉄釉が施されるが、底部の回転糸切り部分にも薄く鉄釉が掛かる。見込みは無釉である。底径は12.0cmである。12も轆轤目が明瞭で、底部は中央に向かって器壁が薄くなる。底部は回転糸切りである。体部は鉄釉が施されているが、底部と見込みは無釉である。底径は14.0cmである。13は擂鉢で、越中瀬戸の口縁部内面が屈曲して立ち上がるタイプものと考える。内外面に錆釉を施す。14は肥前陶器で、体部は内湾しなだら立ち上がり、口縁部でくびれる器形の皿である。内面には銅緑釉、外面には灰白色の釉が施される。口径は19.0cmである。18世紀代のものと考える。15は青磁の碗である。体部がゆるく内湾して立ち上がり、口縁部がほぼ直線的に開く器形である。内外面無文である。やや青みを帯びた緑色の釉が施される。口径は14.0cmを測る。

平坦面1—Ⅳ出土遺物（図版5・20・21）

16は土師器の甕の口縁部である。頸部で屈曲し、口縁端部は面取りしている。色調は茶褐色である。17は土師器の皿の底部である。底径は6.4cmである。18・19は須恵器の体部破片である。どちらも焼成が悪く褐色を呈する。外面は平行叩き、内面ははっきりしない。20は唐津の擂鉢で、口縁部外面が丸く肥厚する。口縁部内面には段が巡り、卸目溝は細く深い。18世紀代のものと考える。21は越中瀬戸の壺の底部である。底部は中心に向かって薄くなり、底部は回転糸切りである。内外面錆釉が掛かる。底径は10.9cmである。21は平坦面1－Ⅳの中でも、集石1から出土した。

石垣出土遺物（図版5・20・21）

平坦面1－Ⅳの前面の石垣部分から出土したものである。22は土師器・甕の体部である。内面は刷毛で調整されている。23は徳利で、外面は前面に内面は上半に鉄釉が掛かる。胎土は灰色で緻密である。焼成も良好である。24は京焼系陶器の皿である。内外面に薄いオリーブ色の透明釉を施し、胎土は灰色で緻密である。19世紀代のものと考える。

参道出土遺物（図版5・20）

25は須恵器である。外面は平行叩きで、色調は灰色である。26は無釉の陶器の皿で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。削り出し高台で、断面は逆三角形である。口径は11.8cmである。

平坦面3（塔跡）出土遺物（図版5・21・22）

27は土師器の皿である。赤みの強い黄橙色を呈し、口径は8.8cmを測る。28は越中瀬戸の匣鉢である。体部は直立し、筒状を呈する。轆轤目が明瞭に残り、外面に鉄釉が掛かる。口縁部は平縁で、口縁端部と内面は無釉である。口径は16.0cmを測る。29は鉄製品で、3方向に足をもつ。2方向の先端は欠けていて、完全な形が残るのは1方向のみである。外面頂部も欠損して、U字形の錆が2方向に残り、摘みのようなものが付いていたのではないかと考える。内面中央部にも、鉄の塊が付いている。30は鉄釘である。錆が多く付いているが角釘である。

平坦面11（横穴前面の平坦面）出土遺物（図版5・20）

31は土師器皿の口縁部である。口縁部は一段撫でられ、段が付いている。口径は15.0cmである。色調は黄橙色である。32は土師器皿の底部である。底部の摩滅は著しいが、回転糸切りのようである。色調は黄橙色である。33は珠洲焼の擂鉢である。口縁部が屈曲して外反する。口縁部内面に櫛目状波状文をもつ。珠洲第Ⅵ期に比定できる。

湧水地出土遺物（図版5・21）

34は越中瀬戸の匣鉢である。底部から直線的に立ち上がる。口縁部は平縁で、底部は回転糸切りである。内外面と回転糸切り部分にも錆釉が掛かる。口径は15.5cm、底径は13.0cmである。

（2）分布調査（開谷地区周辺）

真興寺の調査に並行して黒川村の南東の円念寺山及び開谷集落周辺の分布調査と簡易測量を実施した（第4・5図、図版15・16）。調査は、富山大学人文学部国際文化学科考古学研究室の全面的なバックアップの下、調査担当者及び学生が行なった。また、富山県埋蔵文化財センター主任橋本正春氏には手弁当で調査に参加いただいた。調査は、対象域を円念寺山地区と開谷地区の2地区に分けそれぞれに人為的に作り出された平坦面や集石などの観察を4班に分けて実施した。その結果、大小7ヵ所の平坦面を確認した。

平坦面6は、円念寺山頂部から開谷に向けて続く標高約75mの尾根上である。尾根の先端は幅約1.5mと狭く奥に行くに従って約10mの幅に広がる。全長は、約100mである。この尾根上には、石積みを施した墓群と考えられる遺構が断続的に続いている。戦後、畑地として利用していたこともあり、必ずしも残りはよくないが、崖際に畝状に観察される。墓は、集石墓と考えられるものと、積石墓と考えられるものに大別できるが、この内の1基から蔵骨器が露出しており、採取した（図版6・15・22）。図版6の1は珠洲焼の壺である。蔵骨器として利用されていたもので墓群の最も東南の地区で採取した。器高22.9cm、口径11.5cm、最大径17.1cm、底径8.1cmでいわゆる壺R種A類に分類される。全体がやや重心の低い倒卵形で口縁は、丸みを持ちながら外反するが、口縁端部でやや内湾し、丸みを持った口縁を印象づけている。黄灰色の肌をなし、焼きは良好である。内外面にロクロ成形された痕跡が残り、外底面に静止糸切り痕を残す。頸部から胴上部に櫛歯状工具により一筆書きの2段の波状文が巡る。また、同一の工具で胴部から底部に左上から右下に縦方向の波状文が2列施されている。この裏側には胴上部の波状文に付けて縦方向の波状文が梵字のような描き方で施されている。珠洲焼の編年のⅠ期に属するものと考える。底部端は鋭く、使用痕は認められない。図版6の2は珠洲焼の擂鉢で1の壺の蓋と考えられる。口径21.2cm、器高8.8cm、底部径8.1cmの片口の鉢である。こんもりと膨らみを持って立ち上がる器体を持ち、口縁外端でしっかり面を取っている。注口は、口縁の外周線にコの字状に丁寧に作られている。内面におろし目はない。肌は、緻密で灰褐色を呈する。珠洲焼の編年のⅠ期のものと考える。3・5・6・7はいずれも珠洲焼で3・5は甕、6・7は擂鉢の破片で1・2の周辺で発見した。いずれも古手のもので珠洲焼の編年のⅡ期を下らない時期のものと考えた。

平坦面7は、南北42m、東西13mで、平坦面6の北東に隣接しており標高は、約95mである。一部送電用の鉄塔により現地形が損なわれているが、付近に人頭大の石の露出も観察される。

平坦面8は、平坦面7の東側にあり、平坦面7の同じ尾根頂部端に位置する。標高は約95mでほぼ同じである。規模は、南北20m、東西26mである。

平坦面9は、平坦面8の東約270mに位置する。円念寺山に続く尾根のピークで標高は、134mである。規模は10×13mと小さい。この45m東南に平坦面10がある。平坦面9と同じ尾根上で標高は130m前後の地域である。

平坦面11は、開谷集落の東の八幡社周辺の平坦面10ヵ所を総称して名付けた。標高は本殿のある平面で約160mである。開谷については角川書店発刊の「日本地名辞典－富山県－」によれば、

「開谷集落は、西に円念寺、南東は五位尾と接する。村名の由来は水成岩層中に貝の化石があるので貝谷といったとも、源内坊という寺院の戒壇があったことにちなんだとも言われる。中世には、好田坊・作内坊・奥野坊・源内坊などが開かれ、近年まで無本山無檀那であった。好田坊は京都吉田より来た神官の末裔といわれ、イチイの笏（しゃく）を伝承し、源内坊は源氏の末裔と称し、甲冑1領を収蔵していた。付近には鎌倉・室町期の五輪塔が数多く残されている。立山信仰の霊場として、大岩・岩峅・芦峅とともに開かれた村として、一時は七堂伽藍の繁栄を誇った。」（一部加筆）

とある。「好田坊は京都吉田より来た神官の末裔といわれ」とある部分は、開谷の北西に広がる平野部がかつて堀江

荘と呼ばれる京都祇園社領の荘園があったことと符合する。また、八幡社周辺には多くの五輪塔が観察される。開谷集落には「開谷踊り」という舞踏が伝承されているが（昭和32年7月25日　上市町指定文化財）、この踊りは春秋の祭礼の折に奉納されたほか、村の元服、堂塔の落成、立山参詣者の歓迎の際も踊られたという。

以上のように開谷は宗教色の非常に強い地域で、八幡社の地割りも山岳寺院のそれと大差ない。ちなみに本尊は観世音菩薩像2体で、朽ち果てているが、裳の跡が残っている。

平坦面は10ヵ所で最大のものは32×17m、最小のもので9×10mとさまざまである。このうち主要な平坦面は、社殿のある32×17mの平坦面である。この平坦面に至る参道は、比高差約7m、距離24mの石段でやや急である。石段は46段で本殿からやや軸がずれる。本殿のある平坦面には正面に扁平な石を敷き詰めた幅1.2m長さ13mの石敷きが施されている。鳥居から約9mで20cmほど高くなり拝殿・本殿に至る。周辺には五輪塔（室町期）・宝篋印塔・仏像の破片などが見受けられる。石段の北には、27m×16mの平坦面がある。この北東隅に径約7mの窪みが見られる。周辺には人頭大の平らな石が散見される。この平坦面の北西に道を挟んで10×12mの平面があり墓碑がある。拝殿・本殿のある平坦面の北には長さ20m～45m、幅7m前後の細長い平坦面が棚田状に6ヵ所見受けられ五輪塔石などが散見される。

平坦面12は開谷集落の北西にあり、平坦面11の八幡社の北約350mに位置する。ここは、標高180.2mをピークとする山地の稜線上に南に向かって両手を広げた形で配置される大小18の区画からなる墓群である。現在も墓所として利用されており真新しい墓碑も見られる。墓碑には「好田」「作内」「奥野」など、かつての坊に由来する姓が刻まれている。山頂付近に墳墓堂と見られるお堂があり、これを中心に東に10区画、西に7区画それぞれ階段状に配されている。区画の規模は、墳墓道のある山頂が一番大きく8×13m、ついで、その東隣の6×11mで他のものは尾根に制限されたためか7×4m前後である。この尾根沿いに墓道があり中世の墓群の区画を色濃く残している。

以上、分布調査の調査結果であるが、昨年に引き続き多くの平坦面や墓群を確認した。特に平坦面6は、平安時代後期の遺物を確認しており上山古墓群との関係を含めて今後の調査が必要である。

（3）まとめ

本遺跡について得られた見解を整理し、まとめに変えたい。

1．本堂の礎石建物が3時期確認され、2回の建て替えが行われたと考えた。このうち最初の礎石建物の方位は、山門の向きと一致し、創建当時の建物配置や方位に係わっていると考える。5×4間、または5×5間の建物と推定した。次に建て替えられた礎石建物は、庇のある建物となる可能性がある。昨年検出した礎石建物は、真興寺の最終的な本堂跡と考えた。

2．昨年度調査で池と考えた土壙は、土壙の縁に石が張り付けられていたこと、水が現在も絶えず湧き出していることなどから、池であることを確認した。

3．池1から山門付近まで、本堂の横を沿うように溝跡が検出された。石敷・石列などから成っている。

4．ＳＫ1は炭化物を非常に多く含み、土師器皿も多く検出された。この場で火を焚いたか、一端焚いたものをまとめて捨てたものとみられ、何らかの儀式が行われた可能性がある。

5．ＳＫ2は集石5の東側に当たり、また平坦面3より、比高差3m下に位置する。このため集石5や平坦面3と係わる可能性のある土壙である。平坦面1から平坦面3にのぼる階段は明確には確認されなかったが、ＳＫ2と集石5の北側に拳大の石が多く検出され、階段状の遺構があった可能性があると考える。

6．昨年度調査で塔と推定した礎石建物にトレンチを入れたが、鎮壇具などを検出することは出来なかった。礎石の底部には多くの根石を確認した。

7．参道部分に石段を3段確認した。麓の黒川村から尾根伝いに細道を抜け本道の平坦面にたどり着く直前で視界が大きく開け、幅1.8m前後の参道が出現する。脇には池と考えられる窪みも見うけられ丁寧な構築がなされたことをうかがわせる。

8．出土した遺物は、土師器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸・唐津・鉄製品・銅製品などである。時期は9～19世紀までの時間幅をもっている。しかし、真興寺が継続して存在したとは考えにくく、すべての時期のものがみられるわけではない。15～16世紀が309片、18世紀が82片と遺物が多い。遺跡は9世紀頃からなんらかの営みがあり、15～16世紀に最盛期を迎え2～3回の建替えの後18世紀に寺を移転、炭焼きや、畑地として利用されたことを物語ると考えた。

9．円念寺山周辺及び開谷地区周辺の分布調査と簡易測量を行なった。円念寺山では幅2m全長100mにわたる石積みあるいは石組みの墓群を確認した。時期は表採遺物から珠洲焼の編年でＩ期（12世紀後半）と考えた。谷を挟んで北側に黒川上山古墓群を一望できる位置に占地する事から時期を含め調査が必要である。

10．開谷地区では、八幡社周辺とその北約350mの集落の墓所を中心に調査した。八幡社は周辺の地割が山岳寺院を思わせる感が強く周辺に五輪塔・宝篋印塔・石仏などの破片が数多く残り周辺に墓も散見できる。また集落の墓所は、中世の墓地跡の区割りが現在まで残っているものと考えられ、墳墓堂なども確認された。開谷集落は、宗教集落として室町期に最盛期を迎えたと言われているが、その一端を今に残している。集落の東側は、山地が続くが、ここにかなりしっかりした古道が残る。立山参拝を終えた人を歓迎したとも言われる芸能も残ることからこの地域と立山信仰が深く結びついていたことがうかがわれる。

以上であるが、今年度までの調査で黒川を含む周辺一帯にはまだ数多くの遺構が存在するものと考えられ引き続き調査を継続し、全体像を明らかにしたい。

引用・参考文献

ア　朝日新聞社　1998　『週刊朝日百科　日本の国宝』080

石田茂作　1984　「伽藍配置の研究」『新版仏教考古学講座　第2巻寺院』

伊藤延男　1978　「密教建築」『日本の美術143』至文堂

上田　篤　1996　『五重塔はなぜ倒れないか』新潮選書

宇野隆夫・西井龍儀他　1993　「第二章　医王の山と里の遺跡を探る」『医王山文化調査報告書　医王は語る』福光町・医王山文化調査委員会

大橋康二　1989　『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社

カ　『角川日本地名大辞典16富山県』　1980　角川書店

上市町　1970　『上市町誌』

上市町教育委員会　1995　『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』

上市町教育委員会　1997　『富山県上市町黒川上山古墓群第2次発掘調査概報』

上市町教育委員会　1998　『富山県上市町黒川上山古墓群第3次発掘調査概報』

上市町教育委員会　1999　『富山県上市町黒川上山古墓群第4次発掘調査概報』

サ　(財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所　1996　『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ―』

(財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所　1998　『五社遺跡発掘調査報告　―能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ―』

(財)和歌山県文化財センター　1990　『金剛峯寺遺跡』

静岡県湖西市教育委員会　1997　『湖西市文化財調査報告第37集　大知波峠廃寺跡確認調査報告書』

タ　田辺征夫・森郁夫　1986　「２仏教　A寺院の造営」『日本歴史考古学を学ぶ（中)』有斐閣

富山県　1984　『富山県史　通史編Ⅱ　中世』

富山大学人文学部考古学研究室　1989　『越中上末窯』

ナ　中川成夫　1959　「越後華報寺中世墓址の調査」『立教大学文学部史学科調査報告4』

中野豈任　1988　『忘れられた霊場』平凡社

ハ　北陸中世土器研究会　1994　『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料

マ　埋蔵文化財研究会　1983　『古代・中世の墳墓について』第13回埋蔵文化財研究会資料

『密教大辞典』　1931　法蔵館

宮田進一　1988　「越中瀬戸の窯資料(１)」『大境』第12号

ヤ　吉岡康暢　1991　『日本海域の土器・陶磁［古代編］－人類史叢書9－』六興出版

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

第１図　遺構実測図（縮尺１／300）

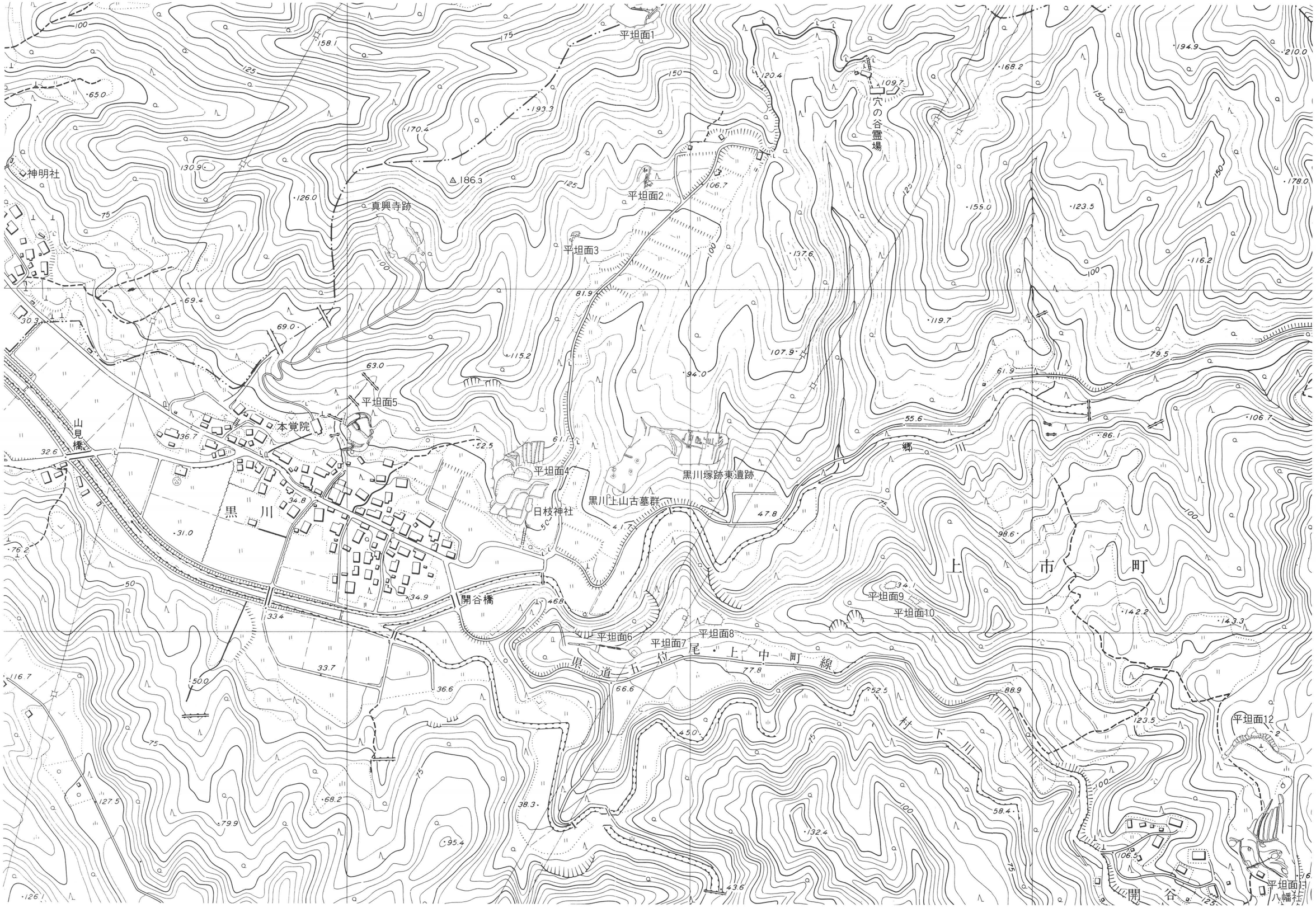
第2図　遺構実測図（縮尺1／60）平坦面3―（塔跡）・SK2

1.黒褐色土　炭混

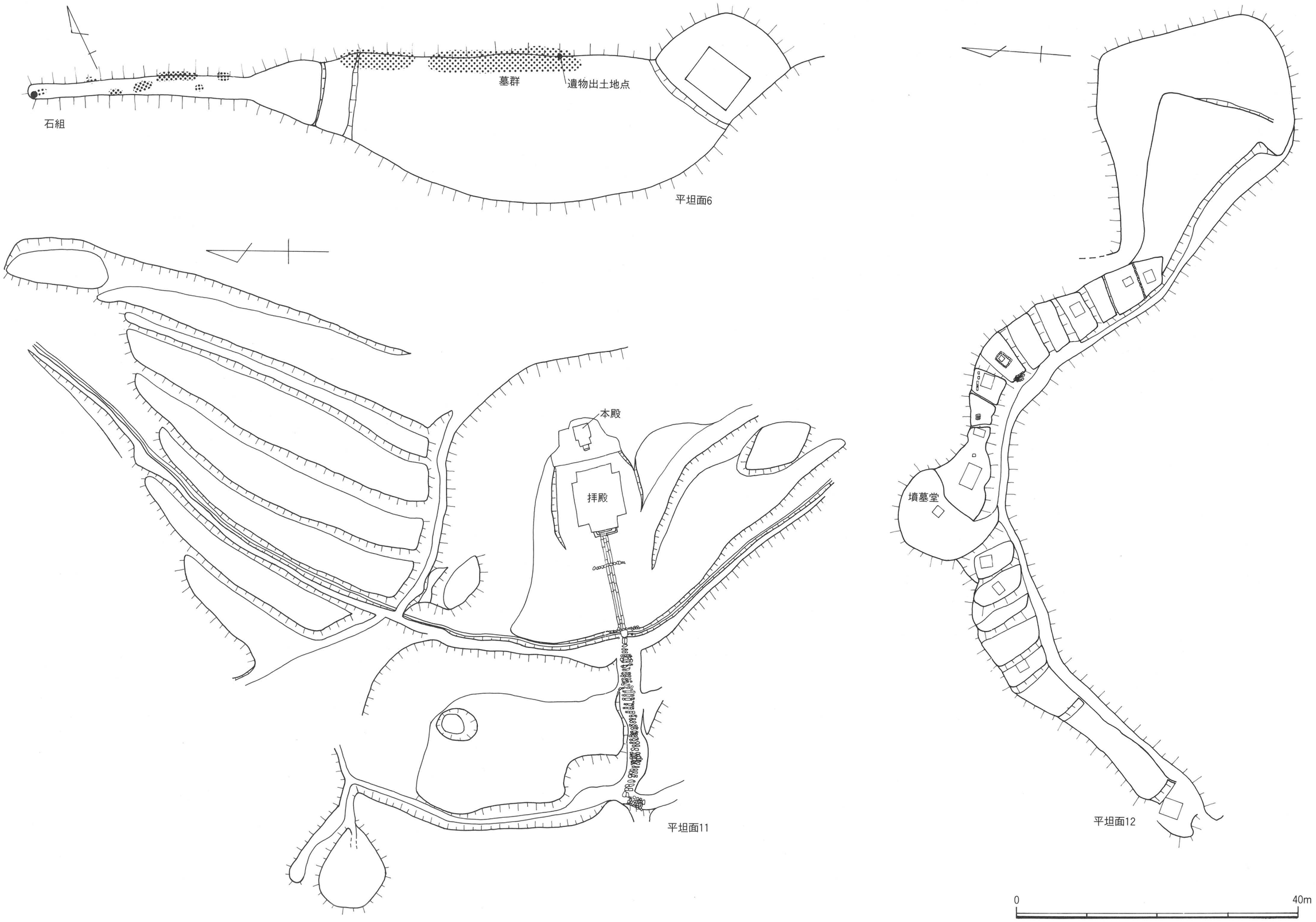
2.暗褐色土　炭わずかに混る

3.黒色土　黄色度粒子を含む　炭多く混る

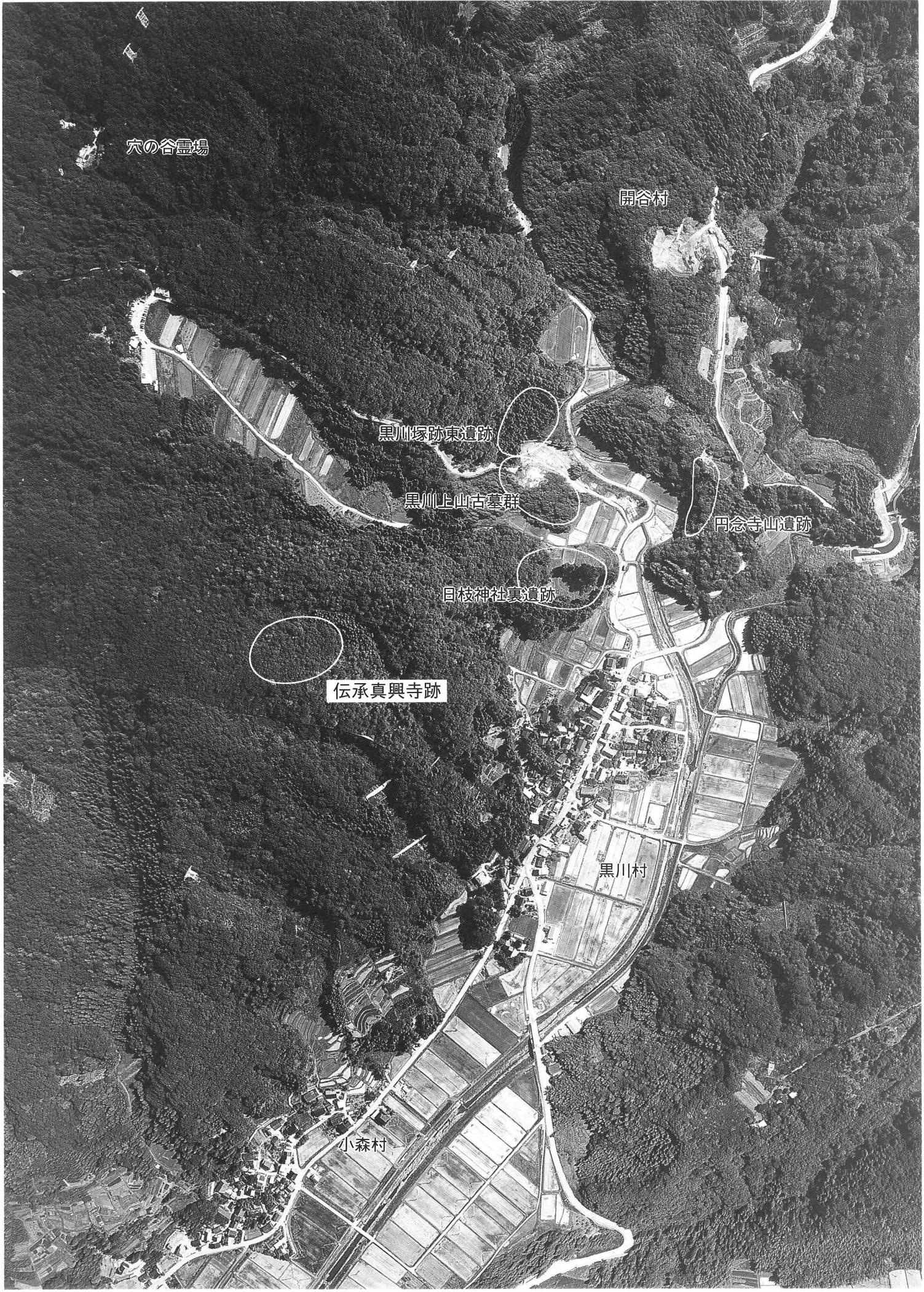
第3図　遺構実測図（縮尺1／60）池1・SK1



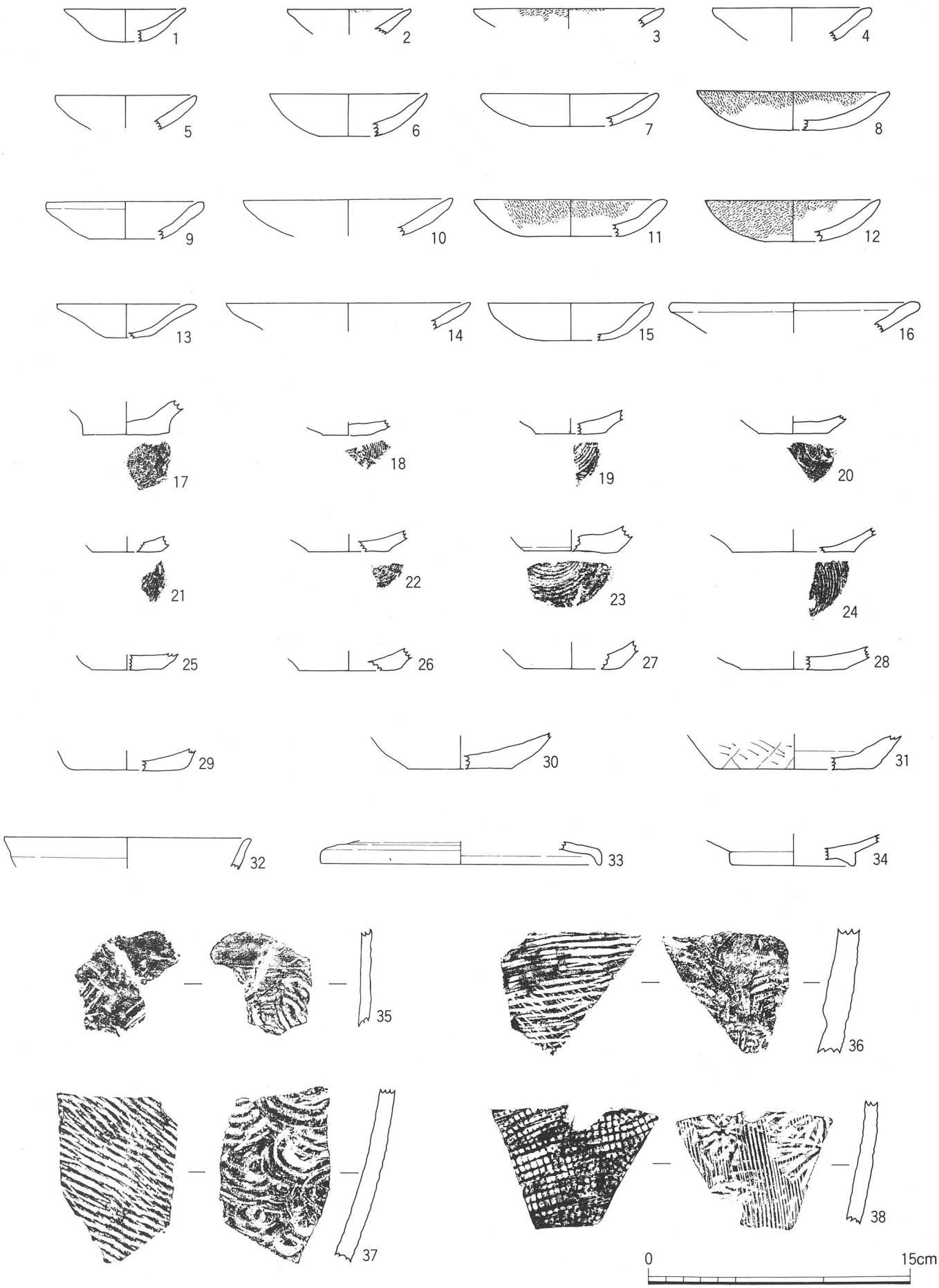
第４図　黒川地区周辺遺跡（霊場関係）分布図（縮尺１／5,000）



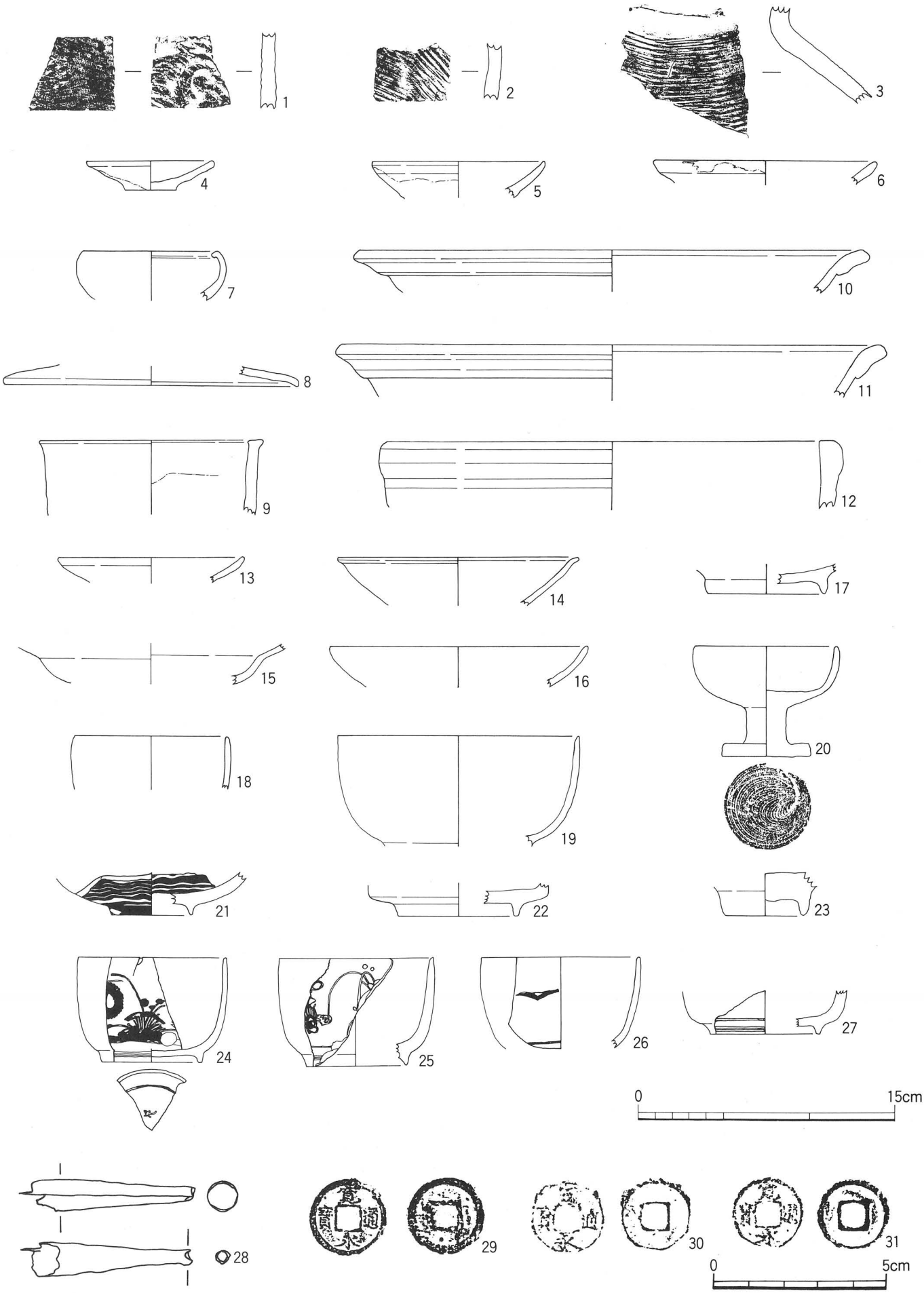
第５図　黒川地区周辺遺跡（縮尺１／500）平坦面６（墓群をもつ）・平坦面11（八幡社周辺）・平坦面12（古い地割が残る墓域）



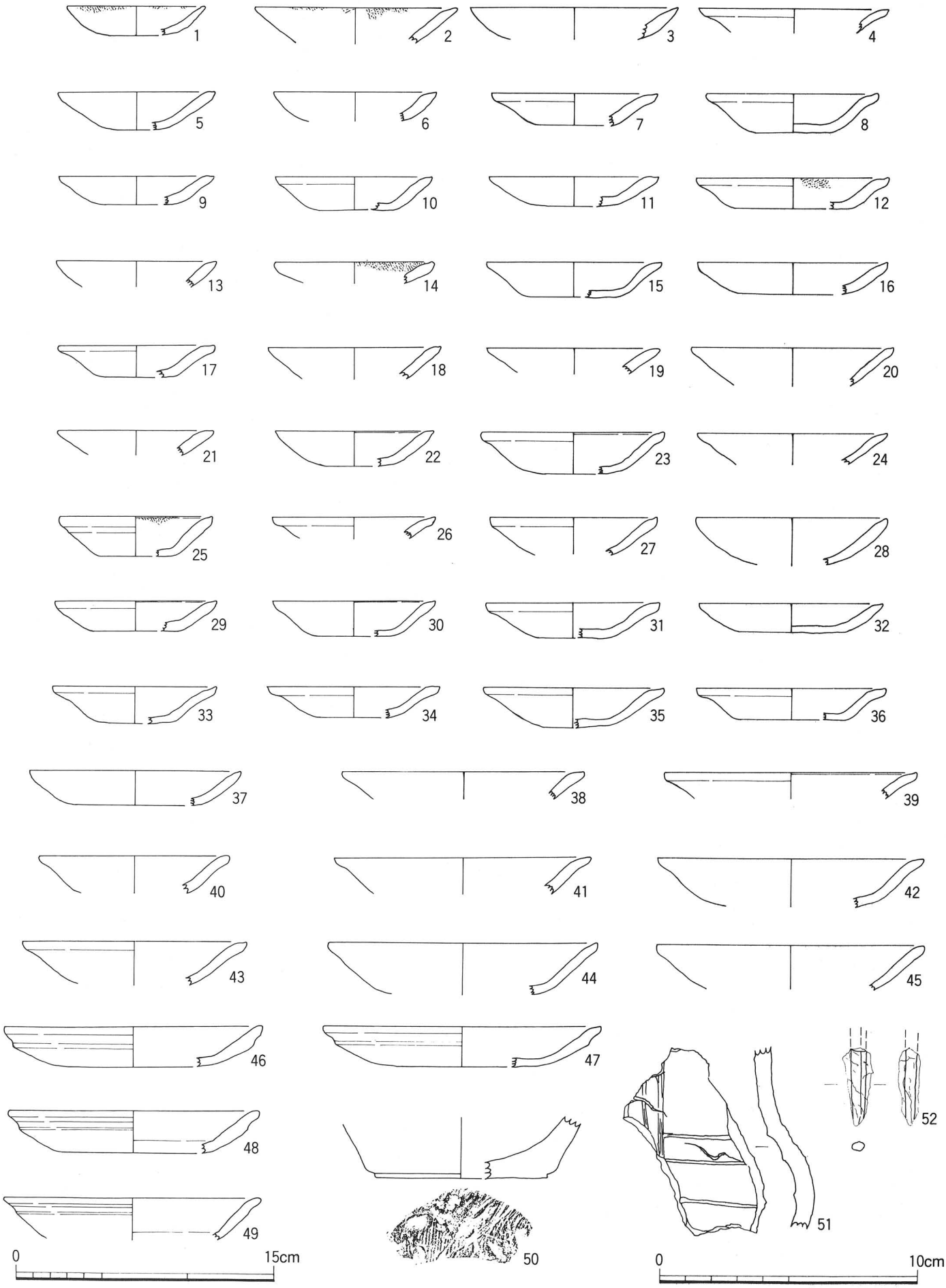
図版１　伝承真興寺跡周辺航空写真（約１／6,000）



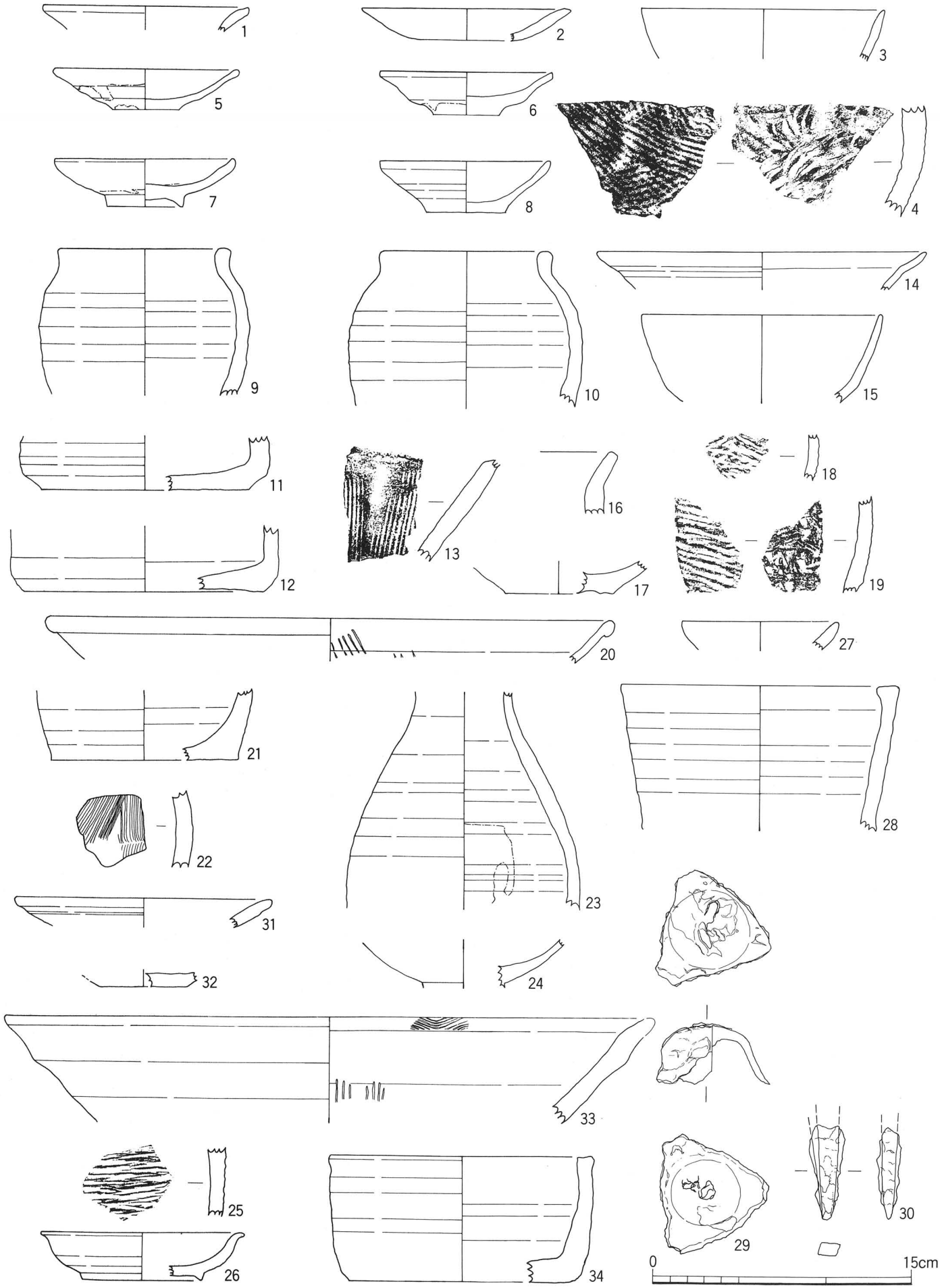
図版 2　遺物実測図（縮尺１／３）本堂跡（１～38）



図版 3　遺物実測図（縮尺　1～27：1／3，28～31：1／1.5）本堂跡（1～31）



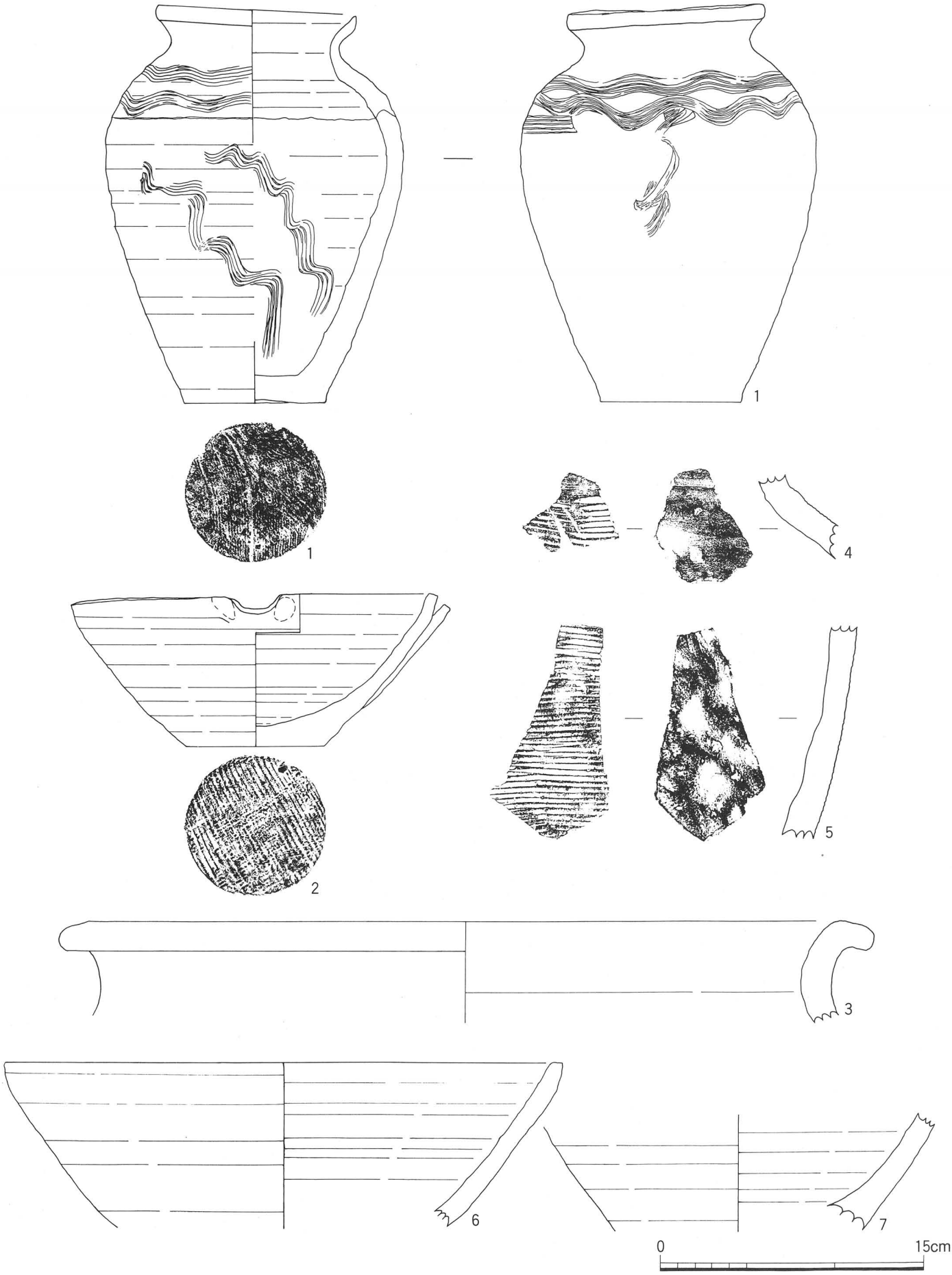
図版 4　遺物実測図（縮尺 1／3，51・52のみ 1／2）SK 1（1～52）



図版５　遺物実測図（縮尺１／３，30のみ１／２）

平坦面１―Ⅲ（１～15），平坦面１―Ⅳ（16～21），石垣（22～24），参道（25～26），

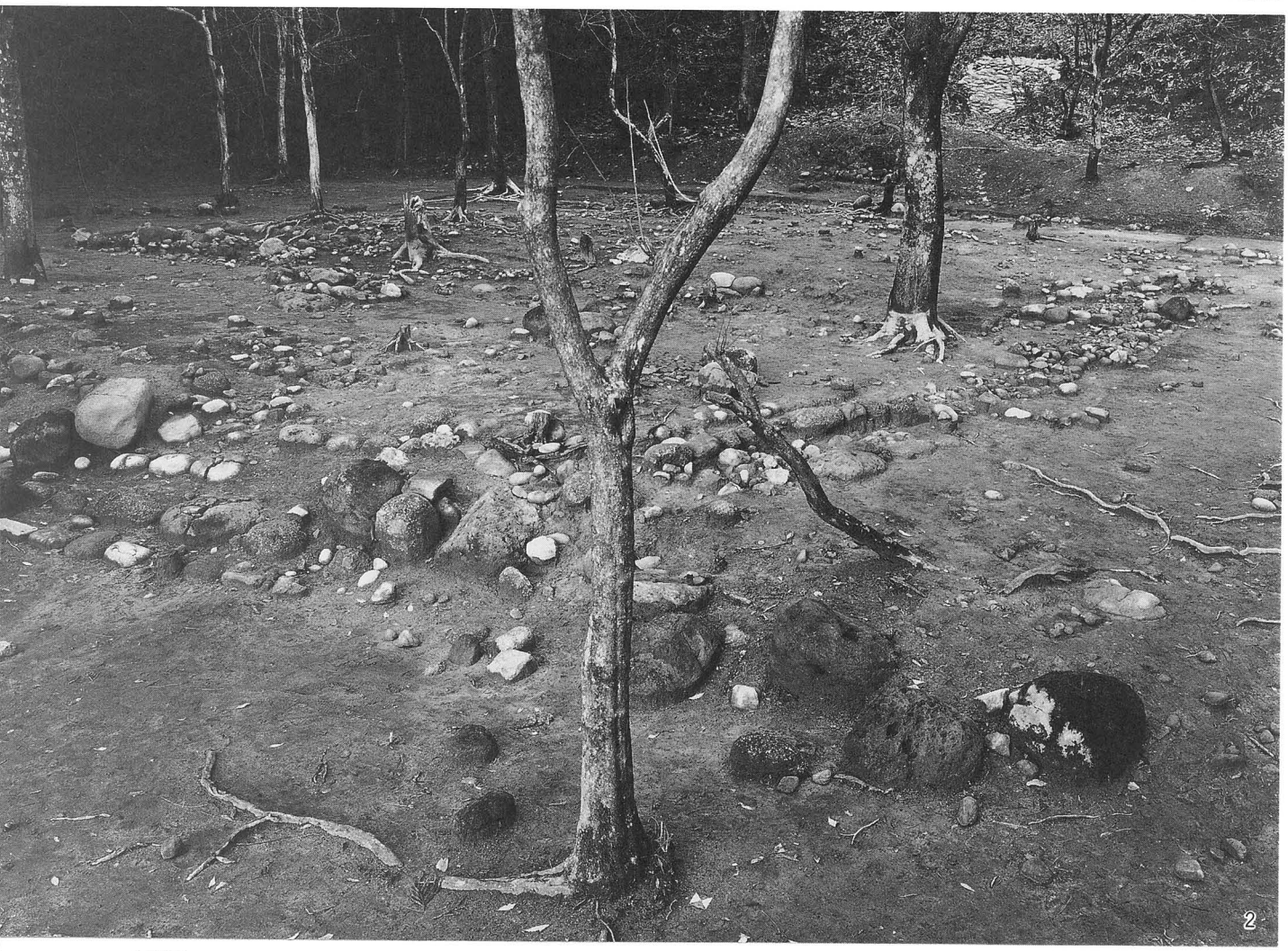
平坦面３・塔跡（27～30），横穴（31～33），湧水地（34）



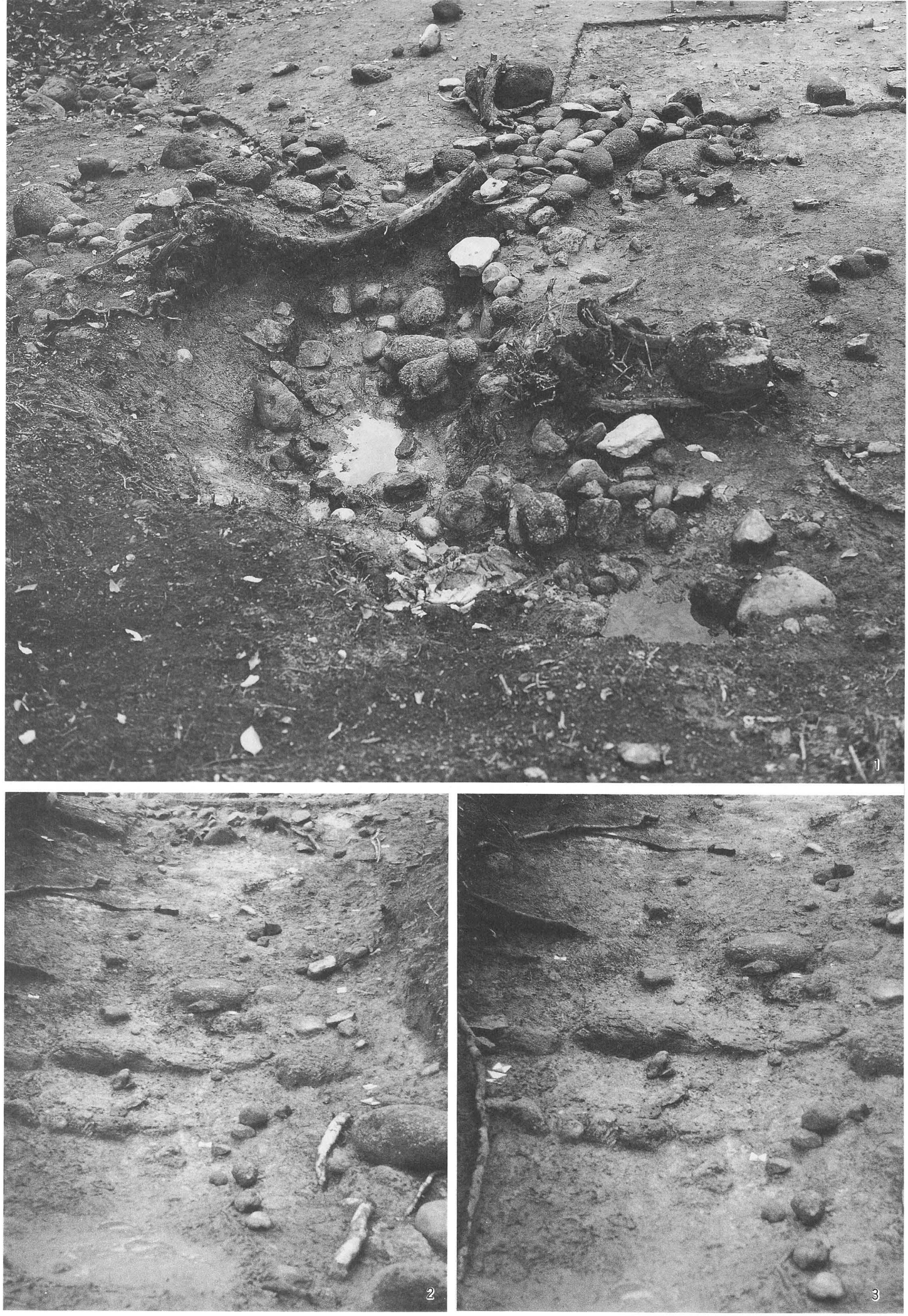
図版 6　遺物実測図（縮尺１／３）

分布調査採集遺物　平坦面６の墓群（１～７）

図版 7　1.遺跡全景（北東より・空中写真），2.遺跡全景（南より・空中写真）



図版 8　1.本堂跡・池跡（東より），2.本堂跡・溝跡（南より）



図版 9　1.池跡（北東より），2.参道跡（南より），3.参道跡（南より）